

16  
125  
96

葛葉集古義

一



萬葉集古義

丁中天

館書圖京東				
九	天			
冊	鏡	架	函	類

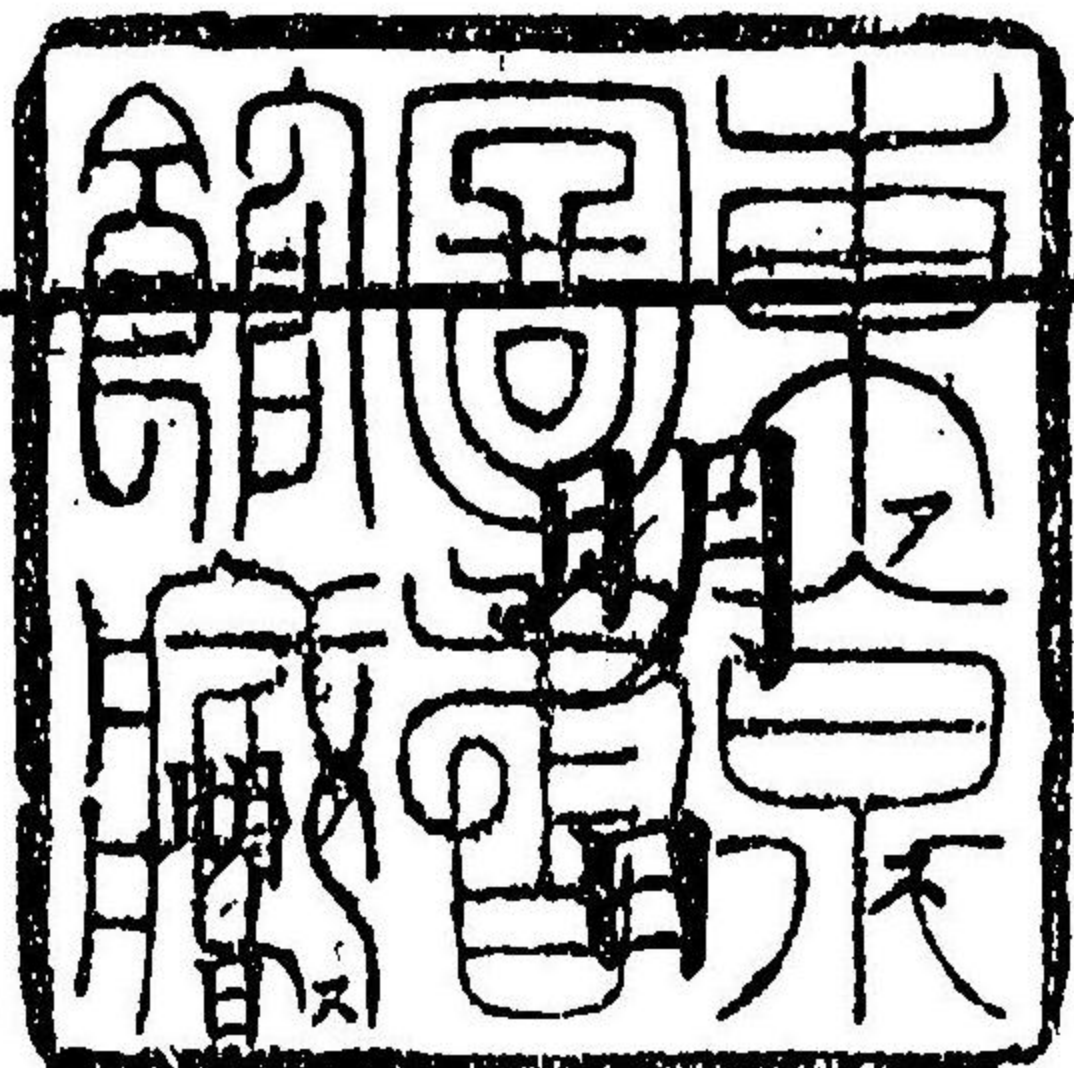


明治十九年九月十一日内務省文書

萬葉集古義一卷之中

土佐國 藤原雅澄撰

香清御原宮御宇天皇代



香清御原宮ハ大和志小在高市郡上居村とあり

てかくれもなし上居ハもと浄御を字音小呼なせる

よ里書るなるべし書紀天武天皇卷小天淳中原瀛真

人天皇天命開別天皇同母弟也幼曰大海人皇子生而

有岐嶷之姿及壯雄拔神武能天文遁甲納天命開別天

皇女菟野皇女統為正妃天命開別天皇元年立為東宮



云々。同卷小元年云々。是歲營宮室於崗本宮南。即冬遷マシキ以居焉。是謂飛鳥淨御原宮云々。二年二月丁巳朔癸未。天皇命有司設壇場。即帝位於飛鳥淨御原宮。立正妃マケタカミララツツヒヤレヒメ爲皇后。后生草壁皇子。尊云々。十年二月庚子朔甲子。立草壁皇子尊爲皇太子。朱鳥元年秋七月乙亥朔戊午。改元曰朱鳥元年。仍名宮曰飛鳥淨御原宮。九月戊戌朔丙午。天皇病遂不差崩于正宮オホミヤニとあり。○御宇二字。舊本小脱せり。目錄小據て補ひつ。袋冊子小引る小も御宇とあり。○代字。拾穂本小御宇とあるは。例小違ひてあり。○天皇代の下。舊本等小天。淳中原瀛真人。天皇とある

ハ。後人の志こざふること既く云る如し。古寫本拾穂本等小ハ。謚曰天武天皇とこの天皇御陵ハ。高市郡檜隈小あり。書云注あり。紀小。持統天皇元年冬十月辛卯朔壬子。皇太子率公卿百寮人等。並諸國司國造及百姓男女。始築大內陵。二年冬十一月乙卯朔乙丑。葬于大內陵。諸陵式小。檜隈大內陵。飛鳥淨御原宮。御宇天武天皇。在大和國高市郡北城東西五町南北四町。陵戸五烟と見えり

トホチノヒメミコノマサデタマヘル  
**十市皇女。參赴於伊勢神宮**  
 イセノオホミカミノミヤニ



時見波多横山巖吹黄刀自

作歌

十市皇女は、天武天皇紀云々、二年云々、天皇初娶鏡王女、額田姫王、生十市皇女、七年夏四月丁亥朔癸巳、十市皇女卒然病發薨於宮中、庚子葬十市皇女於赤穗、天皇臨之降恩以發哀、懷風藻葛野王傳云、王子者淡海帝之孫、大友太子之長子也、母淨見原之長女、十市、內親王とあり、十市は和名抄云、大和國十市郡止保知、この郡名

小やあまの古今集、暮は速く往て語らむ會事の

十市の里に住憂かましとあり、これに會事の遠

保の假字あり、案、十は登、登の假字あり、登保とあ

るは、連へる如く、おれど、本より通、おれ、又、は、本

の、登、衰、知、お、ま、け、む、と、後、お、詠、ま、て、登、保、知、と、唱、へ、り、あ

今、多、し、ら、お、は、定、め、難、し、然、れ、ど、も、今、の、姑、く、和、名、抄、並

新古今集、歌、○參赴云々は、書紀云、天武天皇四年二月、

十市皇女、阿開皇女、參赴於伊勢神宮とみゆ、さてこ

小、お、の、皇、女、の、み、と、舉、げ、は、吹、黄、刀、自、此、皇、女、お、住、ま、つ

れたる女おればふるべし、○波多横山は、大和志、お、山、邊

名、波、多、横、山、云々、神、波、多、神、社、在、仲、峯、山、一、

村、式、屬、添、上、郡、と、あ、る、は、た、ね、つ、ら、あ、し、神、名、帳、云、伊、勢、

國、壹、志、郡、波、多、神、社、和、名、抄、云、同、郡、八、太、郷、あ、り、て、こ、の



河上乃湯都磐村二草武左受。

伊勢の松坂里より泊瀬越して大和へ行道の伊勢の中今も八太里ありて其一里をあり彼方ふかいと  
 うといふ村小横山ありてそこ小大ふる巖ども川邊  
 小も多ければ其處なりと云り○吹黄刀自へ傳未詳  
 ならぬ四巻小見ゆ續紀天平七年の条小富紀朝臣  
 てふありこハ同氏あらむおろつるなり刀自は名  
 なり女名小こと小多し刀自といふこ  
 とのよーは四巻坂上郎女歌  
 の下小くはーいふべー

常丹毛冀名常處女煮手。

河上はカハノへと訓べし本居氏詞瓊繪此歌を引  
 言ふ書れありそは書紀齊明天皇卷小甘檮丘東之川  
 上とある訓注小川上此云箇播羅と見えて據もあ  
 りあれバ實不然よむべきこととみか波良とよむ  
 猶集中の例を檢ふ必すののみ書て河上とも川上  
 き所ふハいづれも皆河原とのみ書て河上とも川上  
 とみかきあるはあつてハハノへと故集中ハ上野上  
 とかきあるはあつてハハノへと故集中ハ上野上  
 べき例と定めてこハハノへと訓つ上は山上野上  
 藤原我守倍高野原之字倍ふといへる類ひなり開字  
 を開とのしさて開ハ必上をいふ小もあらぬ邊とい  
 云ハ例多し

ふふあり河上は河のあり山上ハ山のありと



意得てあるべし。又按、小カハカミとよまむ。十四五廿

丁小可波加美能禰自路多可我夜云々と見えあり。然

る時は上ハ上瀬などいふ上ハはあらざる。河縁カハバ

ふどいふふとのこと、きこゆあり。○湯津磐村ユツイハムラ 舊本

小ハ盤と作。續字彙補小盤典磐同。漢文帝紀盤石之

宗荀子國安于盤石。まの康熙字典小成公綏嘯賦坐盤

石註盤大石也とある。彼國もて後世ハ磐盤

通。用ひける。ふるべし。されどもハ磐字と誤れるも

のふるべし。顔真卿干祿字書小磐盤上。磐石下。盤器と

有。小よれ。ハハ別字なり。こと知れ。今ハ

阿野家本。幽齊本等。は古事記小湯津磐村書紀小ハ五

小磐とある。不従。つ。祝詞小湯津磐村乃如塞座と云語

多。五百箇磐群の謂なり。岡部氏説小五百を約て由

ども。枝の多。齒の繁きを云。村ハ群の意ありと云り。

但。五百を約めて由。といふと云るハ。くも。ありぬ

云。様あり。こは本居氏。伊富を切レハ。與。あれど。與。と由

とハ。殊。ふ。近く通。ふ音なり。自。を古言。ふ。由。とも。與。とも

と云る。そよき。○草武左受ハ。武須。とは。生。なり。書紀小

皇産靈。此云。美武須。毘。とありて。武須。小産。字をあてつ。

常小武須子。武須女。ふどいふ。武須も。同。三。卷十六小。

香山之銚相之本。爾。鮮。生。左右。二。世ハ。ある。昔。の。こ。小。む

も。と。云。こと。思。の。れ。ど。古。ハ。ある。ら。さ。て。上。より。ハ。年

ふ。り。古。び。も。る。巖。上。小。草。の。生。と。る。を。い。へ。る。ふ。て。武。左

受。の。受。の。言。ま。で。ハ。關。ら。ざ。布。留。の。早。田。の。穂。ふ。ハ。出。ぎ

の。例。なり。此。磐。む。ら。の。草。生。ぬ。を。い。ふ。なり。と。い。ふ。説。ハ

い。び。こ。と。な。り。年。經。る。巖。上。小。草。の。生。ぬ。こ







濁音ふり流  
入のらぎ  
以上總論三

のよひ來て、かゝるおもゝるき勝地を見つ  
つさるべきふといふ意ふてもあるべし

吹黄刀自未詳也。但紀曰。

天皇四年乙亥春二月乙亥

朔丁亥。十市皇女阿閑

皇女。參赴於伊勢神宮

紀曰とい。天武天皇紀なり○

阿閑と書紀ふへ阿倍と作り

麻績王流於伊勢國伊良虞

# 島之時。時人哀傷作歌

麻績王ヲミノオホキミ 績、字ハ、績、小ヤトオホヘド、書紀延喜式此、集其  
外ソトの古書コキぬな績、字ナリをカけり、字注ジ小、績與績同  
と見えミる、字シ粟小、績、績也ナリとも見ゆ、麻績ハ、和名抄小  
信濃國伊奈郡麻績ノ乎、美、更級郡麻績ハ乎、美、まゝ伊勢國  
多氣郡麻績ハ乎、字、美、とも見ゆ、かゝ  
あれハ、兩字通、書紀と見えミる、ハ、書紀天武天皇卷  
小見えて、左注の下小引る他、その傳考、る處ト○伊

良虞島三河國より志摩の答志崎へむのひてさゝ出  
あると、いらごの崎といふよ、土人いへりとそ、太神

宮參詣記小海のさゝのひ國のさゝのひをなごめやる小

伊良虞島鳴海瀉ハかゝこふやと思ひやり云々古今



著聞集十二小。伊勢國いらごのわさりなど有ハ。皆此  
 なるべし。千載集十六小。玉藻のいらごの崎の岩根  
 の歌小よれ。松幾代まで小の年の經ぬらむとあるハ。今  
 なるべし。志陽畧志小。伊良湖崎。在伊良湖村。此地者  
 三河國渥美郡也。此地去神鳴一里。以近混志摩國云々  
 とあり。かゝれば三河國なる可伊勢小も亘れる故小。  
 昔より伊勢國伊良虞島と物小志るせる小や。○流ハ。  
 獄令小。凡流人應配者。依罪輕重。各配三流。謂遠中近處。  
謂其遠近。者從京計之。刑部省式小。凡流移人者。省定配所。申官具  
 錄。犯狀下符。所在並配所。其路程者。從京爲計。伊豆去京七百  
 七十里。安房一千一百。常陸一千五百。佐渡一千三百。隱岐七百。

九百一十里。土佐等國一千二百。爲遠流。信濃五百六。伊豫等  
 國五百六。爲中流。越前三百一。安藝等國四百九。爲近流。  
 これら小准へて考べし。續紀小も同トさま小見えて。  
 この事をも神龜元年三月。定諸流配遠近之程とあり。其  
 小諏方伊豫爲中と見えさる諏方ハ。信濃の諏方なり。  
 そのゝ國小建られて有しとなればあり。○時人トビ  
 の時字。舊本小脱多し。今は理もて補ひつ。○傷字。目錄  
 小ハ痛と作り。いづれ小もあるべし。○拾穂本小。作者  
 未詳とあり。



打麻乎。麻續王。白水郎有哉射。

等籠荷四間乃。珠藻苧麻須。

打麻乎ハ枕詞なり人名の上ハ枕詞をおくこと鳥の  
よふ羽田のふ小も天ざある向津媛ふどの類古より  
ありさて十六ハ小打十八為麻續兒等と作るハ今と  
同ドかくて打麻は十二小嫩孀等之續麻之多田有打  
麻懸續時無二戀度鴨とも見ゆいづれも打字を書る  
小よる小麻を續ふは先打和らげて用るものふれば

即ウチソと訓て字の如く打る麻をいふ小やとも

おもてるれども神祇令集解小麻續連等麻續而敷和

御衣織奉云々敷和者字都波多也と見え袖中抄小佐保姫のあり

かけさらきりつものか又十六ハ小打栲者經而

織布とあるふどは全織ま全栲と聞えふれば

全割と打麻も猶借字小て全麻あるべし其ハ常ハ打

和らげふど人の功を施て績ことなるを志のせぞ

てそのま紡績せらるる好き麻と賞て稱る意なる

又常陸風土記久慈郡條小郡東七里大田郷長幡

祖多三命避自三野遷于久慈造立機殿初織之其所織



ともせむ。其まゝに衣裳小用ふ。さて枕詞の義は、全麻ウツの麻ウツ績ウツとかゝれるなり。乎ウツハ之ウツといふも通ふ言なり。八穂ホ蓼タデ乎穂積ホツミ乃阿曾アソふどいへるとおあじさまあり。冠辭考の説ハ、あき○麻績ウツ王ウツ績ウツ字、拾穂本ハ、王ウツ字、於保ホ伎美キミと唱ふることあり。まづ上ウツ代ウツハ某王ウツと書て、王ウツはみお美古ミコと唱來ウツとや、後ハ親王ウツといふ號出來てより、親王ウツを美古ミコと唱へ、親王ウツならぬを王ウツと書て、其をば於保ホ伎美キミと唱へ分ること、なれり。さてその親王ウツと云號ウツ天武天皇、紀四年の條ハ始めて見えぬれども、彼項は既に親王ウツを美古ミコと申し、其ハ分て諸王ウツをバ

某ホ於保ホ伎美キミと唱ふる定まりハあれりけむ。故ホ此、麻績ウツ王ウツも、又十三ニ九ニ丁ニハ、三野王ウツとあるなども、同時代の諸王ウツも、これらは於保ホ伎美キミと唱べり。此のこゝと既ホ一上ホ古事記傳廿二四十九丁ハ、さて天皇の御諱ホハ更ホも云ることをも別食考ホべり。申さむ。高位高官の人、名をバ避て、題詞ホも書さるることなる。ふ。却て皇太子皇子諸王の御名をバ、いさゝのつゝまゝにげふ。高市皇子尊、或ハ舍人皇子、或ハ軍王、などやりふ多く書し、まゝに歌詞ホもさへ。麻績ウツ王三野王などよこて、ぎべて忌避る事あるハ、天皇の御諱ホも、又臣下の名も、各別ホある理あることなど、此、下ホ二



白水本地名漢  
 永平間寶固出  
 燉煌崑崙擊被  
 白水鹵子蒲類  
 海上渝州記關  
 白水東南流三  
 曲如巴字故名  
 三巴代醉編曰  
 唐周郎自蜀買  
 奴曰水精苦沈  
 水乃崑崙白水  
 之屬也通證

十日雙斯皇子命と作る歌の下ふ委云べし○白水  
 ナレヤ白水二字類聚抄ふハ泉と作也此ハ白水二字  
 郎有哉と一字ふ作るふて麻呂を誓と作と同日類ふ  
 王ふハ泉郎と作る例ハ阿麻を白水郎と書ふこと書  
 六卷七卷等み見えたり紀などふも多しこは和名抄ふ白水郎日本紀私記云  
 漁人阿末辨色立成云白水郎和名同上とあり谷川氏  
 郎をあまとよめるハ白水はもと地名郎は漁郎のご  
 とし崑崙奴の類ふて水ふよく沈むより代醉編み見  
 えたり元稹詩ハ黄家賊用鑑さて此一句ハ白水郎ふ  
 ナ利白水郎行早地稀とあり有ばふやといふはとの意なり奈禮也ハ爾安禮也の  
 約りあるなり婆をいをざるハ古言の常ふり哉ハ疑  
 の也なり○珠藻荇麻須るより拾穂本ふいへり珠と

ははむる辭なり例多し藻を稱て云るなり岡部氏考  
 の白玉の如くふれバ珠藻とい小藻の子  
 ふよりいへるハ例の甚備れり麻須ハいままといふ  
 が如し藻を刈おはしままの意なり麻績王と崇めて  
 いへるなり食とあるハ從ばラスと訓べし○歌意麻  
 績王ハかねてハやごとふき人と聞つるふさハなく  
 て海人ふてあればふや今此伊良真島の玉藻を刈て  
 朝夕の食料をいとあまつおもしろまらむといへ  
 るなり罪こそありけめ志の王とおはしまし人の  
 海人と見ゆむありふやつれてさるこそざし給をむこ  
 とハあるべくもあらねど配所のこびりささまとい



ひてふろくいとろし然る心よりかくはよめる  
ふり。題詞。小時、人哀傷作歌とあるハ即其意なり

# 麻績王聞之感傷和歌

續字拾穂本

小績と作也

空蟬之命乎惜美浪爾所湿伊

良虞能鳥之玉藻莉食

ヲ  
コノ  
オホキミ  
コノウタヲ  
キカシテ  
カナ  
シモ  
コタヘタマヘルウタ

ウツセミ  
ノ  
イノチ  
ヲ  
ウシ  
ミ  
ナミ  
ニ  
ヒ  
デ  
イ

ラ  
ゴ  
ノ  
シマ  
ノ  
タマ  
モ  
カリ  
ハム

空蟬のことハ既く出つ○命乎惜美  
元曆本類聚抄拾

穂本等は命が惜さ小の意なり○浪爾所湿ハナニニ

ヒデと訓べし浪は鳴水の義小やと荒井氏説小いへ

り猶考べしヒデはヒダサレの意なり

ゝ。 濕ハ玉藻ある小袖裾ふどの濕るをいふそのぬ

るゝ。 さいとこびりけれどひらまら命のをささ小か

あるこびりきこざるそとの意なり○玉藻莉食ハ

夕マモカリハムと訓べし袖中抄ふカリシクとあり

云後世ふハ波卒てふ語ハ鳥獸のうへ小のみいふざ

とくふれど古は何小も云也後世久布といふこと



と云、つら、古言のやりと思ふ。久布と波牟とハ、  
いさ、の差別あること、見之り。波牟とハ咽下  
をみつきていひ、久布とハ、持、こと、小云  
王と見申、十、卷、六、丁、小、枝、啄、持、而、十、三、三、十、丁、小、年、魚、矣、  
今、昨、十、六、十、八、丁、小、枝、啄、持、而、古、事、記、上、小、鼠、昨、持、其、鳴  
猶、出、來、而、奉、也、な、ど、あ、る、ふ、て、其、用、あ、る、や、う、を、考、へ、  
例、は、五、卷、八、小、宇、利、波、米、波、胡、藤、母、意、母、保、由、久、利、波、米  
婆、麻、斯、提、斯、農、波、由、云、々、又、十、八、久、毛、爾、得、夫、久、須、利、波  
武、等、母、云、々、ふ、ど、あ、り、又、七、卷、二、小、茅、花、乎、雖、喫、十、卷  
九、小、鳥、者、雖、不、喫、十、二、丁、小、麥、昨、駒、乃、十、四、九、丁、小、久  
佐、波、牟、古、麻、能、又、十、六、丁、小、屎、鯉、喫、有、又、十、四、九、丁、小、久  
小、田、乎、喫、鳥、又、同、飯、喫、騰、又、七、丁、攫、實、毛、利、喫、古、事、記、上  
卷、小、乃、生、蒲、子、是、接、食、之、間、云、々、乃、生、笋、是、接、食、之、間、云、

云、まゝ、毎、年、來、喫、な、ど、是、ら、も、皆、一、の、訓、へ、き、所、あ、り、又、  
今、今、世、小、朝、ふ、く、ふ、物、を、朝、た、ん、夕、ふ、く、ふ、物、を、夕、た、ん  
と、云、は、ん、の、食、の、轉、れ、る、ゆ、て、こ、れ、も、古、言、あ、る、こ、も、  
ん、は、飯、の、字、昔、と、お、も、へ、  
○歌、意、ハ、か、く、浪、小、所、濕、て、玉  
藻、を、か、ま、つ、つ、な、ら、ぬ、海、人、の、己、ご、ま、る、こ、と、い、と、己  
び、く、か、な、く、け、れ、ぬ、あ、く、る、く、る、く、き、目、を、見、む、よ、り、  
死、あ、ら、む、こ、そ、中、々、あ、ま、さ、ら、免、と、ハ、思、ふ、も、の、あ、ら、さ  
ま、の、小、命、の、捨、あ、ら、さ、ふ、か、く、る、業、を、る、そ、と、時、人、の、海  
人、小、や、と、お、や、め、き、て、ふ、あ、く、あ、を、れ、み、さ、る、意、を、う、け  
て、こ、と、こ、り、給、へ、る、な、り、こ、れ、も、配、所、の、こ、び、し、き  
さ、ま、と、藻、を、刈、ふ、託、て、上、の、歌、小、答、へ、給、へ、る、な、り



右案日本紀曰。天皇四年  
乙亥夏四月戊戌朔乙卯。三  
品麻績王。有罪流于因幡。一  
子流伊豆島。一子流血鹿島  
也。是云配于伊勢國伊良虞  
島者。若疑後人緣歌辭而誤  
記乎。

日本紀曰云々。書紀を見るに。天武天皇四年夏四月甲  
戌朔辛卯。三位麻績王云々と有。こゝに四年乙亥夏四

月戊戌朔乙卯。三品とあるはかゝる誤なり。品ハ古寫  
本拾穂本等ハ位とあり。○若字拾穂本ハな。○縁  
字拾穂本ハ依と作り。○此左注ハ疑ハ多。如ク麻績  
王ハ因幡國ハ配ナされ賜ハ多。里とさる時ハ伊良虞島  
といふ地。因幡國ハもあ。るなるべし。然るを伊勢國な  
るの名よ。る故ハ地名よ。りて伊勢國と混ハ誤れ  
るなるべし。さて又常陸國風土記ハ行方郡。從此南十  
里板來村。近臨海濱。安置驛家。此謂板來之驛。其西板水  
成林。飛鳥。淨御原。天皇之世。遣流麻績王。之居處云々。  
ハニ所共ハ板木と誤  
れ。ハハ非ハる。とあるハ時代ハ人名も同ハけ



れば外人といふもそれぬを常陸國小流されまへ  
るよ一語に傳へらるるハ所以あるべし。後人多くして

天皇御製歌

三吉野之耳我嶺爾時無曾雪  
者落家留間無曾兩者零計類

其雪乃時無如其雨乃間無如  
隈毛不落思乍叙來其山道乎

三吉野はこヨシ又と訓べし古事記雄略天皇大御歌  
小美延斯怒書紀天智天皇卷歌小史之怒とあればこ  
こもこエシ又と訓べさおと思へど次の御製歌の吉  
野吉見與もヨシ又と訓べければ猶此集ふてハヨシ  
又と訓べし十八丁三ふも余思努と見えふりさて此  
地ハ大和國吉野郡ふてかくれなり○耳我嶺と有は



甚疑へし。美彌我てふ山名。吉野ふて古も今も聞及ば  
 ざるつはかくいふ山名あるべくもおもわさざり。御抄  
 八雲  
 小耳我嶺ハ吉野ふ近き山のふりか、せ賜へるさは  
 ト夫て、近來大和國の名所の車書るものふど小吉野  
 山の一名といひ、まゝ靈塚内村の上、方ある山そふ  
 どのへるさづひハ、皆今の字ハ依てありあてふ説る  
 む。耳我と書る字も心ゆのぞ、誤字脱字ふどあらむ  
 と思はるれば、今ハ姑く下ふ引る十三の歌そ、風も詞  
 も大ある今のふ似るれば、それふよりてこ。カ子。ハタ  
 ケと訓つ。御金嶺ハ靈異記中巻ふ。聖武天皇代、廣達入  
 於吉野金峯、經行樹下而求佛道云々。僧尼令義解ふ。假  
 如、山居在<sub>ス</sub>金嶺者、判<sub>ス</sub>下吉野郡之類也。神名帳ふ。大和國

吉野郡金峯神社。文徳天皇實錄四卷五、卷六、卷三、代實  
 錄二、卷などふも。大和國金峯神あら書義楚六帖ふ。日  
 見え又元亨釋書拾遺抄宇治拾遺今昔物語ふど、其餘  
 の物ふも金峯あまゝ見えて、枚舉べあらむ。夫木集ふ  
 は、神の座こおぬ。ふど、見えて、後、世までも金嶽とそ  
 の峯ともよめり。いふふる、御金峯と御の言をそへふるは、御吉野御熊  
 野ふどいふ例の如し。ああるを岡部氏考ふ。耳我ハ御  
 あり、麿ふ似るれハ、いふあらむといひ、且十三ふ、御金  
 嵩とあるをさへお引出て、金ハ岳の誤ふて、こ。ハカ。金  
 知ケそと、謾お推ハ、定めハ、いハ、あハ、そ、も、ハ、美、加、カ、金  
 と、し、も、い、ふ、ハ、御、魁、の、意、ふ、て、御、は、例、の、美、稱、ふ、ハ、加、カ、金  
 る、の、み、あ、れ、ハ、加、ハ、の、み、も、い、ハ、る、例、多、ハ、由、加、カ、金  
 多、志、良、加、あ、れ、ハ、い、ハ、の、み、ご、と、ハ、あ、れ、ハ、の、う、ハ、美、加、カ、金  
 魁、と、御、の、言、を、重、ね、て、ハ、い、ふ、べ、き、そ、の、う、ハ、美、加、カ、金  
 加、の、言、は、清、て、唱、る、例、あ、る、を、耳、我、と、濁、音、の、字、を、書、る



をや、そもく此集あどよまむはまづ廣く古書を考  
 べし、てこそ、字の誤おどいさぶきことあるを  
 みざるお私心の心もてさぶめむと見るよきさるひ  
 こと、いのでくるもの、あ、か、るを畧解あどおも  
 猶岡部氏、説ふよきて、いまだその誤なるを、知れる人  
 なるま、い、を、う、れ、も、み、お、も、ひ、て、お、ど、ろ、う、い、か、く、も、の  
 ○時無曾、或本、小、時、自、久、曾、と、ある、も、同、く、何、時、と、定  
 る、る、時、も、な、く、常、小、雪、雨、の、ふる、よ、く、な、り、こ、れ、高、山  
 の、常、な、り、曾、ハ、次、な、る、と、ふ、る、つ、な、ら、ら、餘、の、山、小、對、へ  
 て、の、ま、ま、へ、る、な、り、餘、の、山、小、ハ、か、を、あ、り、間、無、時、こ、あ  
 る、雨、雪、の、ふる、こ、と、な、け、れ、を、な、り、○間、無、曾、ハ、ヒ、マ、ナ  
訓、も、れ、ど、も、ヒ、マ、マ、て、ふ、言、の、證、を、マ、ナ、ク、ソ、と、訓、べ、く、○  
未、見、ぬ、古、語、と、も、お、も、は、れ、ね、バ、マ、ナ、ク、ソ、と、訓、べ、く、○  
 其、雪、乃、云、々、こ、の、四、句、ハ、上、の、四、句、を、兼、て、詔、へ、る、な、り、

其ソとハ上小出する時無間無ふる其雪雨之なり○限  
 毛不落モオチズハ限も漏ぎの意なり例は上小いひの限とハ  
 道の限々なり下小其山道乎とある小て道の限とハ  
 志る、その道の限を詔へるハ、道程の長き志る、一な  
 り、お、な、く、ま、ま、道、多、く、限、あ、り、て、長、け、れ、ど、ゆ、く、志、を  
 とも忘れ給へぬよくなり○思、下、叙、來、思、字、類、聚、抄、は、  
 小、念、と、作、ト、は、  
 小、モ、ヒ、ツ、ハ、ゾ、ク、ル、と、訓、べ、く、下、の、言、ハ、上、小、注、ト、畧、解、  
ヒ、ツ、ハ、ゾ、ク、ル、と、よ、み、さ、れ、ど、も、云、々、思、お、ど、い、ふ、と、き  
こ、そ、オ、モ、ヒ、を、モ、ロ、と、い、ふ、古、語、の、例、お、れ、ど、も、句、の、頭  
小、て、畧、け、る、例、ハ、を、さ、く、見、え、る、來、と、ハ、そ、の、お、は、  
こ、と、お、け、れ、バ、ひ、び、お、こ、と、あ、る、べ、ま、ま、道、を、お、ら、な、れ、バ、な、り、さ、て、此、大、御、歌、い、の、あ、る、を



りおあそばくとい。今さぶらふに知がさけれど、其所までおはしませ道をあらを。来とい詔へること志る。されば今世人の心ならバ、思ふ叙行といふべきをか詔へるなるべし。そもく行と来とい。彼と此との差別あることなるふ。古人の行と来といひとつの通ハ云あるごときこゆれども、なふよく考れば其別あることなるされバこゝへそのおはしませることを内ふして詔へるなり。かの倭ふに鳴ての来らむといへるも、行らむといふべき所と聞ゆれども、これも倭の方を内ふして来といへるなり。あらればいづれも

内よりいふと、外よりいふとのけぢめありと心得べし。又来をケルともよむべし。まの訓ときハ過ふ方。そのまへること、なれり。その處までおハキ。まの切、ある辭ふて古言あり。キケハケと切れり。三卷三十八丁ふ。名積来有鴨十ニ三丁ふ。来有入哉誰な。どあり。十七、廿丁ふ。使乃家禮婆と假字書も見え。あり。まの然るべし。訓。○其山道乎。其上の三吉野之耳。我嶺爾とよませせるをさして詔へるなり。此御句ハ上の隈毛不落の上。置て心得べし。○大御歌意ハ、吉野のさぶらき山路を長々と隈もおちぢ、行々おもひつづけらるゝ事の己まなき事と、御とづのら歎き給へるよりなり。この大御歌は、いなる時ふ御製ませる



ともわきまへかゝるきを強て大御詞のさまをおもひ  
 めぐらまふもくははじめ天皇吉野宮小大坐々け  
 る間ホト女の許小通ひ賜ひしことの有て其時小よみふ  
 まへる小やかふかく小戀の大御歌とハ聞ゆるお里  
 凡て集中小此大御歌の體ふるがいと多オホカル有小皆戀歌  
 ふるふてよさとるべし。諸説小吉野山を賞愛ませる  
大御歌とせるは甚多拘泥めり  
 さて十三二十相聞小三吉野之御金高爾間無序雨者  
落云不時曾雪者落云其雨無間如彼雪不時如間不落  
 吾者曾戀妹之正香乎吾字舊本と  
爾小誤  
 あるハ今の御製歌と大の同ト

或本歌 三芳野之耳我山  
 爾時自久曾雪者落等言無  
 間曾雨者落等言其雪不時  
 如其雨無間如隈毛不墮思  
 乍叙來其  
 山道乎

我字拾穂本小毛と作呈いゝる○雪者落等言云々雨  
ハフルチフ  
 者落等言云々の等言ハ人の志かいはふよくりハさの  
 辭なればこゝふかなハ下ふ其山道乎とありて吉  
 野小ての大御歌と見ゆれば等言とハのこまふべく



もなすまの言字ニふがら類聚抄ハ異本ハ之と有ふ  
くみてラジとよ免里それはいのバ本章ハ落家留と  
あるそ正しき○不時如ハトキジクガゴトと訓べ  
し上の時自久をうちのへりのまひさればなり

右句々相換

因此重載焉

天皇幸于吉野宮時御製歌

天皇幸ハ左注ハ書紀を引さる如く八年五月なりさ  
て同天皇同吉野の大御歌なるハかく此ふふさび

殊更ハ幸とくも題詞をわらてる故は上の大御歌ハ  
既くいへる如くまご皇太弟と申せし御時の事とお  
もゆるをもこの大御歌は大御位の後ふて幸の時節  
も著く定めふればなり○吉野宮は應神天皇紀ハ十  
九年冬十月戊戌朔幸吉野宮と見えさて齊明天皇  
紀ハ二年作吉野宮と有は改め造らる免賜ふなり

泚人乃良跡吉見而好常言師

芳野吉見與良人四來三



泚人ヨキヒトは九卷三十一、妹等イモガリ許今木イマキ乃嶺茂シメタテ立ツク孀待木ツクノキ者吉ヨキ  
人見ヒトミ祁牟ケム吉字吉字舊本舊本古古とあるとおなづく誰と誰とハあら

れねど古ありし良人を指てのままへ里ヨシト○良跡ヨシト吉見ヨキミ  
而ハ跡トハとての意なり此所を勝地オキトとて委見ヨクミ而の謂テ

なり委見ハ六卷廿六、難波方潮干ナニハガタシホヒ乃奈凝委曲見名ノナゴリヨクミテナ  
在家妹之待將問多米十卷イハナルイモガマチトハムタメ、朝戸出之君之儀乎アサトデノキミガスカタ

曲不見而長春日乎戀八九良三ヨクミバズテチカキハルヒヲコヒヤクヲラサなどある委曲見ヨクミ小同  
ト下なる吉見與も同意なり○好常言師ヨシトイヒシハ委見ての

ちふまこと小勝地オキトそとさごめいひヨクミなり○芳ヨシ  
野吉見與ノヨクミ與ヨクミ、宇道ウミチ晃親王御本拾穂本等ウツミチノミコノミ小ハ敬ヨクミと作り

抄ヨクミも異本ヨクミ多とこの芳野ハ上ヨクミの三句を兼て詔へ  
あるよゝあるせと、この芳野ハ上ヨクミの三句を兼て詔へ

るふて良人の勝地ヨクミそとて委見てヨクミげふよき地ヨクミそとさ  
ごめいひし芳野をとつゞけ給へるなり吉見與ハ昔ヨクミ

の良人の如くふ委見ヨクミよと詔へるなり○良人ヨクミ四來三  
ハ良人とは今の良人なりこハ從駕の人の中ヨクミふさし

賜ふ人ありなるべし四來三ハ本居氏玉小琴小或  
人のヨクミとよめるを用ふべし見とのみ云ても見

よと云意ふなる古言の例ありと云る實ヨクミふさもある  
べし今按ヨクミ、小解案抄ヨクミ、ヨキヒトヨクミとよめ里界解

よめるは○大御歌意ハ古ありし良人のよき地ヨクミそと  
ある



てよく見て、げふよき地といひ、芳野のこゝそ、委曲  
 見よ。大のふ見過きことなあれかへさぐもよく見  
 ぬ。今の良人よと詔へるなり。吉野を世ふことある所  
 ぞとはめある歌。集中小甚多き中。小。七卷。八。小。妹之紐  
ユラヤカフチヲイヒノヨミトモット  
 結八川内乎古之并人見等此乎誰知。并ハ淑の誤寫あり。結ハ川ハ吉野川の内ハあり。  
あり。九卷。十五。小。古之賢人之遊兼吉野川原雖見不  
飽鴨と有などハ大なることと同しく。上つ代小在  
 賢人といへるふるべし。○此、御製歌ハ、句頭毎小同語  
 ある體の一格ふて、四卷。十九。小。將來云毛不來時有乎  
コジチヲコムトハマカジコジチヲモリヲ  
 不來云乎將來常者不待不來云物乎。とある小同。古

今六帖ふ。心こそ心をはある心なれ心のあまは心な  
 りけり。又後ふ。思はしと思ふハ物を思ふかな思ハド  
 とぞふ思はしや君。まゐ思人思はぬ人の思ふ人思は  
 ざらなむ思ひ知べく。又さくらはく櫻の山のさくら  
 をなさくさくらあればある櫻あり。あどいふ  
 歌のきこゆるも。右の體ふよれるものなり

紀。曰。八年乙卯五月庚辰朔甲申。幸于吉野宮。

藤原宮御宇天皇代



藤原宮は高市郡小て香山の西畝火山の東耳梨山の南なること。此下藤原宮御井をよめる長歌小て志られり。今も大宮殿と云ていさゝるの處を畑ふもき残りて松立てある地其跡なりとそさて香具山ハ十市郡なれども宮地ハ其西小て高市郡小屬るなるべし。釋紀小氏族畧記を引て藤原宮在高市郡鷺栖坂北地といへり。志あるを大和志小高市郡大原村持統天皇八年遷居於此とあるハさびり其大原即藤原と云て同じ高市郡なれば人みお思ひ混ふことおれどかの大原なるハ鎌足大臣の本居の地小して宮地の藤原とハ同名異地なり。此宮ハ持統天皇文武天皇二御代の宮なり。持統天皇ハ書紀持統天皇卷初小高天原廣

野姫天皇少名鷺野讚良皇女天命開別天皇第二女也。母曰遠智娘天皇深沈有大度天豐財重日足姫天皇明齊三年適天淳中原瀧真人天皇武為妃天淳中原瀧真人天皇二年立為皇后云々と見えて四年正月戊寅朔皇后即天皇位十月甲辰朔壬申高市皇子觀藤原宮地十月二月癸卯朔辛酉天皇幸藤原觀宮地八年十二月庚戌朔乙卯遷居藤原宮十一年八月乙丑朔天皇禪オホミクニヤラ天皇位於皇太子と見ゆ此よりして太上天皇と稱奉れり。續紀小文武天皇帝大寶二年十二月甲寅太上天皇崩三年十二月癸酉火葬於飛鳥岡壬午合葬於大内山陵とあり。



り。諸陵式小。檜隈、大内陵藤原、宮御宇持統天皇、合葬と檜前、大内陵戸更不重充。

見ゆ。文武天皇ハ。續紀小。天之真宗豐祖父、天皇、天淳中

原瀛、真人、天皇天之孫、日並知、皇子、尊之第二子也。母、天

命間別、天皇天之第四女、日本根子天津御代豐國成姬、

天皇元明是也。高天原廣野姬、天皇十一年、立為皇太子。八

月甲子朔、受禪、即位。慶雲元年十一月壬寅、始定藤原、宮

地宅。四年六月辛巳、天皇崩。十一月丙午、謚曰倭根子豐

祖父、天皇、即日火葬於飛鳥岡。甲寅、奉葬於檜隈、安古山、

陵。諸陵式小。檜前、安古岡、上、陵藤原、宮御宇文武天皇、在

三町南北三とあり。御少名を輕、皇子と申しよる事下

小出○天皇代の下、舊本等小。高天原廣野姬、天皇と注

し。拾穗本小ハ。謚曰持統天皇。元年丁亥十一月、讓位輕

太子、尊號曰太上天皇とあり。元年云々の詞、古寫本又

類聚抄小も同くあり。是皆後人の志とさなり。上小云

了如く。こハ二御代の標なるを。持統天皇一御代のこ

の標と意得よること。あへもくもかゝをらいよ

スメラミコトノミヨミマセルオホミウタ

# 天皇御製歌

天皇皇、字、舊本小良小誤、類聚抄古寫本等小よりつ。ハ。持統天皇なり。岡部氏

考ふ云るハ。こハ持統天皇のいまふ清御原、宮小おた



しまし、ちと夏のをどのつ頃、埴安の堤の上おどふ  
 幸し給ふふかぐ山のあさりの家ども小衣を掛りし  
 て有を見そなをうてよませ給へるなりと云る如し  
 されどこの天皇やびて御代あるしめしてよりハ藤  
 原宮御宇天皇と稱も事ふれば清御原宮の標中ふ入  
 ぞこ、ふこの代標を建て、その標中ふ収るなるべ  
 し

ハル スギ テ ナツ キタル ラ シ シロ タヘ ノ コロモ ホシ  
 春過而夏來良之白妙能衣乾

タリ アメ ノ カ グ ヤマ  
 有天之香來山

夏來良之ハナツキタルラシと訓べし夏ハ古事記傳  
 夏高津日神の名義を云る條小夏は成立なり理を省  
 き多都を切めあるふて是も稻のことなり四季の夏  
 も、と此意ふて稻よ里云名なり夏ハ暑ふ里と云説  
 はあるしと云り猶考べしキタルハ來而有ふれば  
 の切こ、も來有良之おどこそ書べきことおれど既  
 タ 來の一字をキタルと訓こと、ふれ里と見えて集  
 中ふ來字のこふてキタルと訓べき所多し良之の言



へ上トキふくキをスくハいへり。夏來てある事ハの十ふ七八ハ一  
 るキ意ナリなり。さてこのつゞけの體ハは十九丁十八ふ春過ス  
 而テ夏キ來ス向ス者ハまる十卷ハふ寒過テ暖ハ來ル良キ思ハ十七ハふ民  
 布フ由ユ都ト藝ギ都ハ項ハ芳ハ流ル波ハ吉キ多タ禮レ登ド金金槐槐集集ふみ冬冬つつき  
字の誤。ののづづららき山ふ霞柳柳別別とあるハ。真真冬冬盡盡ふて意意ばえ  
 は同トととあぶら古古風風のいひひざまふいいさららあ  
 り。ふふどいへる皆皆同同トとつづけげざまふり○白白妙妙は妙  
 は借字字ふて白白布布の義あるよしは冠辭辭考考ふいへるが  
 如し。此此御御歌歌ふてハ枕詞詞ふあらむるる白白き衣のよし  
 なり。○衣衣乾乾有有ハコロモホシタリと訓べし。飛飛鳥鳥井井本  
 六六條條本本等等ふもかくあるハ古訓訓のまらなり衣衣乾乾てあ

里里の意なり○大御歌大御歌意意は契冲冲春春ままでの衣衣ハあらみ  
 かのむむめめふふしし。去去年年より箱箱ふいれおける衣衣をば  
 今今著著む料小小濕濕氣氣ふどかか己己のさむとてかぐ山のふも  
 とあけてきむ家家々々ふ取出出てはせるが見ゆるふつけ  
 て時節節のいまれることをまませ賜へるなり十四東  
 歌歌ふ筑波波禰禰爾爾由由伎伎可可母母布布良良留留伊伊奈奈乎乎可可母母加加奈奈思思吉吉  
 兒兒呂呂我我爾爾努努保保佐佐流流可可母母とありて山山ふ布はきことも  
 あれバこそかくハよみけめ今今の御歌歌これふ准へて  
 心得心得べしと云り朗詠詠集集更更衣衣の詩ふ猶春春なりとおほ  
 一一終終しきかぐ山山こさりふ衣衣はしるをふと御御覽覽



して、予てハもや夏來てあるらりと。時のうつれるを  
驚きて歎き給へるなるべし。さて昔時ハ、此山小人の  
家多く有ける故小。衣をも乾けるなり。かくて  
山家ふるが故小。他所へも見之けるあるべし

過近江荒都時柿本朝臣人

マロガヨメルウタ  
磨作歌

近江荒都云々。天智天皇六年。飛鳥崗本宮よ。近江大  
津宮へうつりま。十年十二月崩給ひ。明年の五月大

海人大友の二皇子の御軍有し。事平らぎて大海人  
皇子尊ハ。飛鳥清見原宮ふ。天下知し。めぬれば。近江  
の宮は舊都とあれるなり。さてこの朝臣の此舊都を  
過里ハ。假の御使ふて下里し。を里の。又ハ近江を本  
居ふて。衣暇田暇あどめて下里し。ふもあるべし。○柿  
本朝臣人麻呂。この七字。古本ハ。ハ。父祖は考べきもの  
なり。さて柿本氏の事は岡部氏  
考別記小委くいへ。里考べし

玉手次。畝火之山乃。檀原乃。日



知之御世從阿禮座師神之盡。  
樛木乃彌繼嗣爾天下所知食  
之乎。虛見倭乎置而青丹吉平  
山越而何方所念計米可天離。  
夷者雖不有石走淡海國乃樂

浪乃大津宮爾天下所知食兼。  
天皇之神之御言能大宮者此  
間等雖聞大殿者此間等雖云。  
霞立春日香霧流夏草香繁成  
奴留百磯城之大宮處見者悲



毛<sup>モ</sup>

玉手次は、畝火<sup>ウヂヒ</sup>と云む料の枕詞なり。此、つゞけ四、卷七、  
卷ふも見えとて、さてかくいひのける義ハ、玉手次  
ハ把襷<sup>タテタスキ</sup>といふなるべし。さて把襷といふハ、まづその  
結法<sup>カケザマ</sup>、左右の袖口より背へ貫通<sup>トホ</sup>して、兩肩の正中<sup>タテナカ</sup>、頸の  
下<sup>モト</sup>、小把<sup>タテ</sup>ね縮めて結ぶと、今世も玉襷<sup>タマタスキ</sup>と呼至。古のも志  
のせしとそ云いならむ。此、義ハ既く上軍王、歌の注ふ  
ことわれり。さて畝火とのられるハ、いとく辨へるべ  
きとせめて思へば、把襷<sup>タテタスキ</sup>頸根結と云ならむ。頸根<sup>ウヂノネ</sup>ハ、延

喜式祝詞等ハ、宇事物頸根<sup>ウツモノウヂノネ</sup>、衞抜<sup>ヱキ</sup>と見えて、頸の下<sup>ウヂノモト</sup>を云  
言なるを知べし。さて宇奈禰<sup>ウツナミ</sup>を約れば、宇禰<sup>ウツミ</sup>とあり。禰<sup>ミ</sup>  
の切<sup>キレ</sup>、武須<sup>ムス</sup>妣<sup>ヒ</sup>を約れば、美となれ。武須<sup>ムス</sup>の切<sup>キレ</sup>、武<sup>ム</sup>美<sup>ミ</sup>と  
妣<sup>ヒ</sup>の濁音とハ親く通へば、うねみうねびハ全、同言な  
り。さてその頸根<sup>ウヂノネ</sup>、結ぶよしハ、上<sup>ウヘ</sup>云るが如し。冠<sup>カ冠</sup>  
考<sup>カ</sup>、小<sup>コ</sup>、荷<sup>カ</sup>、田<sup>タ</sup>、在<sup>在</sup>、滿<sup>マン</sup>、説<sup>説</sup>を擧<sup>ト</sup>て、襷<sup>タスキ</sup>を嬰<sup>オウ</sup>ると續<sup>ツ</sup>けつらむ。神<sup>カミ</sup>代<sup>ト</sup>  
紀<sup>キ</sup>、奈<sup>ナ</sup>、餓<sup>ガ</sup>、勢<sup>セ</sup>、屢<sup>ル</sup>、多<sup>タ</sup>、磨<sup>マ</sup>、廻<sup>ヘ</sup>、彌<sup>ミ</sup>、素<sup>ソ</sup>、磨<sup>マ</sup>、廻<sup>ヘ</sup>、云<sup>ク</sup>々<sup>々</sup>とあり。奈<sup>ナ</sup>、餓<sup>ガ</sup>、勢<sup>セ</sup>、屢<sup>ル</sup>、多<sup>タ</sup>、磨<sup>マ</sup>、廻<sup>ヘ</sup>、  
と見えて、此、説<sup>説</sup>古<sup>コ</sup>事<sup>ジ</sup>記<sup>キ</sup>傳<sup>デン</sup>ハ、全<sup>ゼン</sup>頸<sup>ケイ</sup>、古<sup>コ</sup>言<sup>ゴン</sup>ハ、宇<sup>ウ</sup>奈<sup>ナ</sup>、雅<sup>ヤ</sup>、流<sup>リウ</sup>、  
よ、字<sup>ジ</sup>、奈<sup>ナ</sup>、我<sup>ガ</sup>、勢<sup>セ</sup>、流<sup>リウ</sup>、な、領<sup>リョウ</sup>、巾<sup>キン</sup>、あ、ど、著<sup>シヨク</sup>、る、を、云<sup>ク</sup>、る、ふ、て、知<sup>チ</sup>、  
て、其<sup>ソノ</sup>、頸<sup>ケイ</sup>、玉<sup>タマ</sup>、あ、る、ハ、領<sup>リョウ</sup>、巾<sup>キン</sup>、あ、ど、著<sup>シヨク</sup>、る、を、云<sup>ク</sup>、る、ふ、て、知<sup>チ</sup>、  
襷<sup>タスキ</sup>ハ、主<sup>メ</sup>と肩<sup>カド</sup>、あ、る、け、て、袖<sup>スリーブ</sup>、を、か、ぐ、る、料<sup>リョウ</sup>、の、も、の、右<sup>ミダヒ</sup>、の、説<sup>説</sup>、  
あれ、其<sup>ソノ</sup>、頸<sup>ケイ</sup>、あ、る、何<sup>ナニ</sup>、の、用<sup>ヨウ</sup>、ハ、古<sup>コ</sup>學<sup>ガク</sup>、の、と、も、の、冠<sup>カ冠</sup>、辭<sup>ジ</sup>、  
ハ、い、ふ、ひ、な、き、論<sup>ロン</sup>、あ、る、を、世<sup>セ</sup>、の、古<sup>コ</sup>學<sup>ガク</sup>、の、と、も、の、冠<sup>カ冠</sup>、辭<sup>ジ</sup>、  
考<sup>カ</sup>、の、説<sup>説</sup>、ふ、ゆ、ご、ね、て、こ、と、さ、ら、小<sup>コ</sup>考<sup>カウ</sup>、出<sup>デ</sup>、べ、き、も、の、と、も、世<sup>セ</sup>

萬葉古義一



ざゑるハい ○ 畝火之山は既く出 ○ 檀原は畝火山カシハラあり○日知之御世ヨ從ヨ舊本ぬ或云自宮と注せりそれ  
あり○日知之御世ヨ從ヨありのらねと本章の隨べし  
こハ神武天皇の御世をさして申せり古事記中巻云  
神倭伊波禮毘古命與其伊呂兄五瀬命二柱坐高千穗  
宮而議云坐何地者平聞者天下之政猶思東行即自日  
向發幸御筑紫云々故如此言向平和荒夫琉神等退撥  
不伏人等而坐畝火之白檮原宮治天下也云々書紀云  
觀夫畝傍山東南檀原地者蓋國之壤區乎可治之是月  
即命有司經始帝宅云々辛酉年春正月庚辰朔天皇即  
帝位於檀原宮是歲為天皇元年尊正妃為皇后生皇子

神八井命神渟名川耳尊故古語稱之曰於畝傍之檀原  
也大立宮柱於底磐之根峻峙搏風於高天之原而始馭  
天下之天皇號曰神日本磐余彥火々出見天皇焉とあり  
日知ハ岡部氏考云日知てふ言ハ先月讀命は夜之  
食國を知しめせと有る對て日之食國を知らまはは  
日女の尊ふとこれよりして天都日嗣志るしを御  
孫の命を日知と申奉れと書紀ハ神聖おど有ハから  
文體ハ字を添へて二字ハてそれハのみと訓あり  
聖字ハ泥て日知てふ言を誤る説多かりとあり從は  
用とも由とも訓べし抑この辭古ハ用理とも由理と



も用とも由ともいへること。古事記書紀より。集中と  
 推あゝて考知べし。其中小用と云るは。集中小五卷  
 十九小。久須利波牟用波。十四十一小。之氣吉許能麻欲。  
 又十三與曾爾見之欲波。又十四伊加保世欲。又同安素  
 乃河泊良欲。又十七伊毛我多太手從。又十八麻久良我  
 從。又廿九兒呂家可奈門從。十七七小。安我松原欲。十八  
 十小。許欲奈枳和多禮。又二十伊爾之敝欲。又二十和可  
 禮之等吉欲。十九十三小。遠始欲。あど有。由といへるは。  
 五卷九小。伊豆久由可。又一三十阿麻能見虛喻。六卷十一  
 小。真木立山湯。又十二左日鹿野由。十一七小。久時由。十

四十四小。目由可。汝乎見牟。又三十伊豆由可母。又三十  
 倍由毛登毛由毛。十五七小。伊素末乃宇良由。又八奈美  
 能宇倍由見由。又十伊蘇乃麻由。又十七夜蘇之麻能宇  
 倍由十六三十小。中門由十七十六小。之多由孤悲安麻  
 里。又九二十伊爾之弊由十八六小。許由奈伎和多禮。十九  
 六丁小。平城京師由廿卷二十小。宇倍之神代由。又三十  
 之良比氣乃宇倍由。あど見えふり。あほ古事記書紀あ  
 ハ畧きて集中あるとのみ引つ。但一言ふいひて宜  
 しく書紀ふ。古事記ふ。用とのみ云て。由と云ることあ  
 てハ。用とも由ともみ云て。用と云ることあ。集中ふ  
 と。右の如し。例由理と云るは。廿卷二十小。阿須由利也。



又二十奈爾波能津由利但此一首ハ姑續紀四卷詔  
六丁奈爾波能津由利由字流布本ハ與十卷詔ハ皇朕高御  
小高天原由利由字流布本ハ與十卷詔ハ皇朕高御  
座爾坐初由利今年爾至麻豆云々本由理行來迹事會  
止ふどあり用理と云るハ例を引までもなく古今集  
の方ハ用理とのみ云て餘の抑此辭ハ多とへバ古よ  
三種ふいへること絶さり  
り今今より後彼より此此より彼と云は尋常ふて今  
殊更小論ふ及バぞこの從これなり日知之御世  
より以來といふことなればなり然るを或ハ表の如  
く爾の如くふも聞え或ハ漱のごとく又爾豆といふ  
ふも通ひて聞ゆるなど種々あれバ凡ての例どもと

引て首卷ふことわりおけり合考べり○阿禮座師古  
事記傳神武天皇條ハ安禮坐之御子とあるところふ  
云阿禮坐は生坐ふて宇麻禮賜へると云ことふり阿  
禮てふ言の意ハ新現と通へり生るは此身の新小  
成ふ也又現るはなればふり明宮御宇天皇の生坐る  
とも其御子者阿禮坐とあり續紀一ハ天皇御子之阿  
禮坐牟彌繼々爾と見え月次祭祀詞ふも阿禮坐皇子  
等乎毛惠給比と見え萬葉一卷小云々六卷四十小阿  
禮將座御子之嗣繼ふど見ゆ又書紀允恭天皇卷小皇  
后產大泊瀬天皇とある産と阿良志麻須と訓るハ令



生坐アサありとあり。業ノハ阿禮アハ宇麻禮ウマを切めある言コトあり。云イハハ誤アり。うまるハ母ハ小所コ生ナて。母ハと主トとしていハ阿禮アハ現アる。義ノ師シハ過去コ小コて。子ハと主トとして云イハ故ノ其ノ言ハもと別ニなり。師シハ過去コ一方ハの事ハといふ辭ハなり。○神之盡カミノハク盡ハク字ハ。舊本ハ小書ハと作スるハ非ハなり。今ハ一ハ本ハ小書ハは。日知ニ之ハ御世ハより生繼座ハ一ハ神々ハ悉皆ハといふあり。神ハとハ御世ハ御世ハの天皇等ハと申ス。盡ハクといふことハ古言ハ小多シ。こハハ今ハ俗ハ夫々ハと云イハむ。如シ。中昔ハ開キふ。ことハぐ。小ハハ此ハ朝臣ハきこえさせり。給ハハれ。よと。ふむ。國讓ハ小與ハ一ハハあやといハそがれ。いハら。ば。ことハぐ。侍ハら。む。ふ。ど。見ミえ。と。り。但ハ。これハの。ことハぐ。ハ。俗ハ小委ハ細ハと云イハむ。お。如シ。い。され。ど。○膠木カキノ乃ハは。繼嗣ケイジといハむ。料ハその言ハの。も。と。ハ。一ハつ。ふ。り。○山管ヤマノ乃ハ背向セウキョウと云イハ係ハるとの枕詞マクシなり。集中シュウジュウ小多シ。こハハ山管ヤマノ乃ハ背向セウキョウと云イハ係ハると

同格ドウカクなり。都賀ツガと都藝ツギと音親ネノく通トふ故ハ。疊タガねつづけ。る。ふ。て。須宜スダと蘇我ソゴとつづけ。あるも。亦イ同トトことな。り。膠木カキのことハは。品物シモノ解トかいふべシ。○彌繼ヤメニ嗣爾ニハ御世ミヨ御位ミマをつづせ給タマひ。と云イハ。こハハ倭爾ヤマトニ而ニといふ事ハあるべきことなる。小上コノウヘの從ヨ下シタの倭乎ヤマトヲ置オキ而ニ志シる。けれ。ば。も。ぶ。ける。なり。○天下テンカハ。ア。メ。ノ。シ。タ。と訓クべ。し。十八ジッパチニ。丁チヨウ廿ニ卷マキ五十イッパチ小安米ヤスヤシメ能ノ之シ多タ。又マタ二十ニジュウ丁チヨウ阿米アミ能ノ之シ多タ。靈異レイイ記キ小宇コウ。志シ阿米アミ乃ハ天慶六年テンケイニ書紀シキ竟宴ケイエン歌カ小阿馬アマ能ノ芝多シタとあり。後ノチ世セ阿米アミ乃ハ我ガ之シ多タと。○所知シロシメ食シ之シ乎カ。舊本コウホンハ。來キと注ツせり。ハ。志シる。一ハの。もの。の。意イあり。志シる。一ハの。もの。の。意イあり。志シる。一ハの。もの。の。意イあり。



めくくものといふさまおおもくけめのと連下し  
 て意得べし。是をこの朝臣の句法の妙處（ホ）はありけ  
 る。然るを畧解ふ。或本の食來とあるのさまされり  
 る。いへるハ、くもくわらむといふべし。此集を熟讀玩  
 味あらむむらりの者は論をま。○虚見（ホ）とありて。或云  
 る。むておのづから曉るべし。○倭乎置而（ホ）。或云倭  
 虚見と注せり。今この枕詞上小出。○倭乎置而（ホ）。或云倭  
 ハ或本註用つ。この枕詞上小出。○倭乎置而（ホ）。或云倭  
 乎置と注せるは。とるべららむ。而の辭ふくは。置  
 ころし。但し拾穂本ハは。或云のらむ。而字あり。置  
 ハといめおく意なり。ともゆめぬと云。此末小飛鳥（ホ）  
 アスカノサヲオキテイナバ  
 明日香能里乎置而伊奈婆とある置小同ト。○青丹吉（ホ）  
 この枕詞上小出。○平山越而（ホ）。越字類聚抄古寫本拾  
 て舊本ハ平山乎越とありて。或云平山越而（ホ）。平ハふら  
 と注せ里。或本のらむらしけられ用つ。

も義よりかけるな。奈良山ハ近江への道路なり。○

何方ハ俗ふどのやうふといふ小同。凡慮の左あり

がとさよくなり。按ふ。天智天皇紀ハ六年三月己卯遷

諫者多童謡亦衆云々。とあるを思ひ合され。遷都諷

と遷をことハ古より民の嫌へる事おれ。襄ハハ

こしそしれ。意あるを。凡慮のなありがさきよ。不

いへる。のとも聞ゆれど。この天皇ハ大織冠大臣と共

小謀。まうて。蘇我入鹿を誅ひ。まひ。凡中興の皇帝ハ

て。ましませ。バ。只。慮の。あり。が。さき。を。云。る。あ。ら。む。

○所念計米可。舊本ハ御念食可とあり。或云所念計  
 念食計米可と云。で。ハ。言。足。を。ど。さ。れ。ど。さ。い。ふ。べ。く。  
 も。な。し。こ。の。差。別。ハ。古。語。を。熟。味。得。ら。む。人。ハ。あ。る。べ。  
 け。さ。れ。バ。こ。れ。も。或。本。の。米。ハ。牟。の。の。よ。へ。る。な。り。さ。て  
 ろ。さ。よ。ら。し。け。れ。バ。用。つ。米。ハ。牟。の。の。よ。へ。る。な。り。さ。て  
 この句の下ハ。今一つ詞を加て意得べし。此古格の一



ふて、近ごろ余がはじめて考出あるなまさればこゝ  
へいの方サカ念サカるけめ、云々ありけむといふ意ふ  
見べし、あせざれば可カの疑辭結トクまらぬ、古來此集トク  
知シ食シ兼ケとあれ、其詞ふて結めありとおへるなる  
べし、されど彼處トクて結めてハ一首の意貫トクあざる  
り、そもく、のく長歌の中間ナカラふて、詞をそへて意得る方  
格は古事記仲哀天皇條歌トク、許能美岐袁迦美祁牟比  
登波曾能都豆美宇須邇多豆々宇多比都々迦美祁禮  
加母麻比都々迦美祁禮迦母許能美岐能美岐能阿夜  
邇宇多陀怒斯佐々、これトクも諺トクひ、酸トクければ、も、舞トク  
ふ意トク、假トクふ言を補トクて見トクざれ、此下藤原官役民歌トク、天  
加母の辭結むる所なり、

地毛縁而有許曾云々伊蘇波久見者神隨爾有之トク、これ  
地も縁トクて有トクこそ、云々有トクらめといふ意、假トクふ、二卷人  
言を補トクて見トクざれ、ハ、許曾の辭結むべき所、ハ、  
麻呂歌、何方爾御念食可由縁母無真弓乃崗爾宮柱  
太布座御在香乎高知座而明言爾御言不御問日月數  
多成塗トク、これトクもいふ、さ、ま、念トクる、め、せ、の、云々ありけ  
ハ、可トクの疑辭結トク、又同卷同人歌、何方爾念居可考紀之  
長命乎露己曾婆朝爾置而夕者消等言霧己曾婆夕立  
而明者失等言云々、これトクもいふ、方トク念居トク、長トクる、  
けむと云意を、假トク、三、卷坂上郎女歌、何方爾念雞目鴨  
ふ補トクて見トクべし、  
都禮毛奈吉佐保乃山邊爾哭兒成慕來座而布細乃宅



乎毛造荒玉乃年緒長久住乍座之物乎云々。これもの方念  
けめりも云々ありけむとい十三挽歌小何方御念食  
可津禮毛無城上官爾大殿乎都可倍奉而殿隱隱在者  
云々。これの上三、卷家持卿歌小逆言之狂言登加聞白  
細爾舍人裝束而和豆香山御興立之而久堅乃天所知  
奴禮云々。これの逆言の狂言十七同卿歌小波之伎余思奈弟乃美許  
意小假小言を補て見べし。波太須酒吉穂出秋乃芽子花爾保  
等奈爾之加毛時之波安良牟乎。何のりも云々ありけ  
弊流屋戸乎安佐爾波爾伊泥多知奈良之暮庭爾敷美

多比良氣受佐保能宇知乃里乎往過安之比紀乃山能  
許奴禮爾白雲爾多知多奈妣久等安禮爾都氣都流又  
同卿歌小近在者加弊利爾太仁母字知由吉底妹我多  
麻久良佐之加倍底禰天蒙許萬思乎多麻保己乃路波  
之騰保久關左閑爾弊奈里底安禮許曾與思惠夜之餘  
志播安良武曾云々。これの關さへ小隔て有バこそ云  
見などある。これらみな其例あり。諸注者この論  
くしてまぐりきもれるハ、件、の歌。さて以上二句ハ、地  
とらつして虚見倭乎置而の上小置て見べし。○天離  
ハ、夷の枕詞なり。神代紀夷小見えさるををドめて集



中ふへ彼此おほし、高橋正元、こへ高光天傳天照など  
 いへるまぐひふて天小離る日といふ意小比の一言  
 ふいひのけーのみふて、書紀神功皇后卷、天疎向津  
 媛命とあるも、向津日の意ふいひつゞけーとも併考  
 べーと云、凡、某離と云詞小、某處小離る意なると、某  
 處を離る意なるとの異あり、家放里離國離など云ハ、  
 家を放り里を離る國を離る意なり、夷離奥離など云  
 ハ、夷小離里奥小離る意なり、かゝれば、天離も天小  
 小離る日の意といひをれさることなり、然るを冠辭  
 よりひふの國をのぞめ、天と共小遠放りて見ゆるよ  
 りふて、天離るとハ冠らせさるるるとハ、こゝより

避る離れて遠きを云 ○夷者雖不有比那と云名は神  
 と云るハ多かへり、代紀下卷夷曲歌、阿磨佐箇屢避奈菟謎廼云々、夷津  
 あり、此、歌ハ傳ふければ委くは知のあけれども、西方  
 の北方の國の女と、阿米那流夜云々と見えていとふ  
 事記ふも、夷振とて、阿米那流夜云々と見えていとふ  
 と、いふ歌のみのせ、此、歌ハ載と見えていとふ  
 了、其、名、義、は、未、思、ひ、得、ず、岡部氏考別記、比那は日  
 は、ハ、神、代、紀、小、避、奈、菟、謎、と、い、へ、る、ハ、天、都、紀、加、延、波、阿  
 國の女をいふ、古事記、比那、毛、々、流、都、紀、加、延、波、阿  
 米表、淤幣、理、云々、志、豆、延、波、比、那、表、淤幣、理、て、ふ、天、阿  
 對へて、下つ國と比那と、天、神、子、と、日、神、子、孫、と、も、申  
 い、天皇とあめをべらきとも、日のみ子とも、申、御門  
 1、天皇とあめをべらきとも、日のみ子とも、申、御門  
 を、天、つ、み、か、ど、と、い、ふ、日、の、御、門、と、も、古、言、ふ、り、か、く、て、言、を  
 ふ、事、と、日、の、下、と、い、ふ、思、ふ、乃、志、多、の、三、言、を、約、め、る  
 解、ふ、比、那、の、比、ハ、日、な、り、那、は、乃、志、多、の、三、言、を、約、め、る  
 了、ふ、り、數、言、を、一、言、と、さ、る、ふ、ハ、上、下、の、二、言、を、約、仍、て



日の御子の敷まを官附と天とし外つ國を天の下と  
して比那といふなりと云るは意得ぞそもく神代  
紀の避奈菟謎を下つ國の女をいふと云ハ何の  
據ありていへるや又古事記の比那表淤幣理の比  
那を下つ國とせるハ天ばありふ對へていへらばこ  
そまづ然いハむもいさ似よ里あることあらめ  
那迦都延波阿豆麻表淤幣理とせむハ又那ハ乃  
志多の三言を約めると云るさてこの比那古  
も例のわさくごとあらざや  
且夷字を書るは正しくあるる字ふはあらざれど  
も外ふ填べき字なければあばらく此字を書るふ里  
夷字ハ一の漢國ふていはゆる中國といひてみづの  
らある地の坂を離るる諸國といふ名ふて比那ふ  
あるる字ふハあらざのしそもく比那とは皇都と

さのりある地をふべていふ名ふハあらざして方土  
ふつきていひ一名ありその方土ふ就ていひとハ  
畿内近國をさのりある西方北方の國を比那といひ  
東方の國をバ阿豆麻といひことふそありける  
るを比那とは皇都の地とさのりある諸國とあべ  
いふ名と意得來れるは夷字ふのみまどへる甚しき  
非ふり伊勢物語ふ昔男陸奥國ふまろみ行至ふけ  
りそてある女京の人ハめづらふやおるえけむせ  
ちふ思へる心ふむ有けるさてあの女中々み戀ふ死  
むハ乘子ふそ成べりける玉の緒をあり歌さへそ  
比那備多りける源氏物語末摘花ふ末つむ花の方の  
ことと侍從ハ齊院ふまぬりかよふ己の人ふてこの  
頃ハふの里けりいふあやうひふびさるかぎり  
ふて見ふらぬ心ちそまる常夏ふ近江君の事を  
ふいとひふびあやしき志も人の中ふおひ出給へれ  
ハ物いふさまもあらざ東屋ふ常陸守の事をいと備



さましくいふびとるものふてうちあみつゝきい  
さり浮舟のこときいと物つゝましくてまごいふ  
さる心ふいらへきこえむこともなく枕草紙の五節  
那比那しうらぬけしき為あるハ云々又受領の  
なと出まきりさりともしきういふ見知ぬこと人  
ふ問聞などいせどと心ふくきものなり云々家  
トいとわろくひふびとる云々いときよげあれど又  
ひふびあやしくいげまよえだまびよせちご出し  
あふどもあるもあるそのをばあべに彼頃よりは  
く皇都をさるりさる地をばあべに彼頃よりは  
ふはあれ里しる但しこれらの方土ふい拘らぬま  
て朝都めらげ物の野鄙しきをかとしめて云るあ  
べ方土をさして云る證ふなりなりとさしこれど又  
之集ふ陸奥國子鶴の池の堤ふて重之父のよめる歌  
ふ千年をバひふふてのこや過しけむ子鶴の池とい  
ひて久しきとあるハ離れ夷の意を兼ありとおほゆ  
れべ既く彼頃ハ混れありしこと有りなるべし源  
氏物語蓬生ふ源氏君の須磨浦ふ物し給ひさりし事  
を今のどら聞えつづきいふのわられふおとるべし  
のより聞えつづきいふのわられふおとるべし

家といふ所にて鹽湯浴に比那の住ひを思ひ出ば戀  
都へ歸るとして日數經し比那の住ひを思ひ出ば戀  
かるべき旅の空哉鴨長明海道記の參河國小至里ぬ  
云々比那の住處は月より外なるめ馴る物なり云  
云々阿佛尼轉寢記の述江國野路といふ處より云  
云々われのころちのふして美濃尾張の境ふもなり  
ぬ云々なごあるふて思へば中昔の季つるふよりハ  
正しく混乱てあべて皇都を離る地といふことハ  
意得しあまの安房國小朝夷郡あれどまべて地名  
ハ何處もこと小來由ありて號こふれは常の例ハ  
ハあつへりさて書紀崇神天皇卷中四道將軍以下我  
夷之狀上奏焉景行天皇卷小東夷之中有日高見國應神  
天皇卷小東蝦夷悉朝貢九恭天皇卷小遣某々等於多禰求  
顯宗天皇卷小華夷持統天皇卷小遣某々等於多禰求  
蠻所居ふどある戎夷蝦夷野蠻ふどとヒナと訓る  
ハ皆古味き後そはまづ古事記下卷雄略天皇條三  
人のしわざありそはまづ古事記下卷雄略天皇條三  
重姝歌小麻岐牟久能比志呂乃美夜波云々毛々陀流



都紀賀延波阿米表淤幣理那加都延波阿豆麻表淤幣  
理志豆延波比那表淤幣理云々とある。これ明證なり。  
は、かく阿豆麻と比那とを分ちいふべきことあり。お  
は、その舊例をいはずとある。小書紀景行天皇卷小十  
八年春三月、天皇巡狩筑紫國、始到夷守云々、乃遣兄夷  
守弟夷守二人、令觀云々、集中小は二卷、四十小、人麻呂  
の石見國、死れたる時、丹比真人の人麻呂妻の意、小  
擬ひて作る歌、小、天離夷之荒野爾君乎置而三卷、十六  
小、天離夷之長道從戀來者自明門倭島所見、八、丁、十六  
出、是も播磨國、おどより、西方をさして、四、卷、丁、十六  
比、那と云ること、一首のりへおてある。、四、卷、丁、十六

丹比真人笠麻呂下筑紫國時作歌とて、天佐我留夷乃  
國邊爾直向淡路乎過粟島乎背爾見管、是も四國あ  
那と云るなり、且淡路ありまで、比那といはざり、  
ふれ、此、一首おても、五、卷、廿六、筑前國、司山上、憶良歌、小  
阿麻社迦留比奈爾伊都等世周麻比都々、六、卷、三十、石  
上、乙麻呂、卿配土左國之時歌とて、王命恐天離夷部爾  
退十五、六、丁、到對馬島、淺茅浦、船泊之時云々、作歌とて、  
安麻射可流比奈爾毛月波豆禮々、杼母、又古今集十八  
小、隱岐國、小流されて侍ける時、小よめる、篁朝臣、思ひ  
き、や夷の別、小衰へて、海人の繩、多き、漁為むとは、おど



ある。これら西方の國といへる例なり。又十七十八  
 九ふどふ越中國のこを天離夷とも。天安麻射可流比  
 夷放國ともいへるところ。凡て幾二十首計あり  
 ぬべし。これ北方の國と比那と云る證あり。又九卷二  
 九長歌小。天離夷治爾登云々。乎將越日者とあれは是  
 丁越國と云り。又十三十九小。天皇之遣之萬々夷離國  
 治爾登夷治爾等羣鳥之朝立行者。是ハ傳知ざれど  
 へ任らる人小。贈など見えあり。東方の國をバ九て  
 比那といへること。此集の項まで一もあき小て。比  
 那とハ多し。邊鄙をなべていふ名ハはあらざり。粗忽  
 ことも曉るべし。古人の語と精嚴小。字をば粗忽  
 小せることとあるべし。か

て古書とは讀べきことある。後世人ハ多し。字面小  
 のみか、づらひて。語の本とむむとせざりて。古  
 書の表ふていひし名と意得てものすめるハ。蒙昧あり至  
 とふべいひし名と意得てものすめるハ。蒙昧あり至  
 て。比那ハアレドと云はれ。比那と云はるや。かくては  
 近江國あり。比那といひしは。比那と云はるや。かくては  
 米可比那といひしは。比那と云はるや。かくては  
 爾之有半ふど。近江國をあらば。まづさきあり。趣あれ。首  
 者雖有とて。近江國をあらば。まづさきあり。趣あれ。首  
 尾の意相貫をて。かまぐあまふひ。あきことなる  
 と。大神景井考ふ。こハ夷者雖不有とあり。不字  
 を脱せるなるべしと云るハ。實ふいはれある事なり  
 けり。さらば御代御代天下志ろしめしけるものこそ  
 の大和國とさしおきて。比那といふはとの國小はあ







○淡海國名義は字の如く淡海國といふことの約  
まれるなり。猶古事記傳小出○樂浪サ、オミ波、宇類聚抄ハ古  
事記仲哀天皇條小爾追迫敗出沙々那美オヒセメ悉斬其軍云  
云應神天皇大御歌小志那陀由布佐々那美遲表云々  
書紀神功皇后卷小及干狹々浪栗林云々欽明天皇卷  
小發自難波津控引船於狹々波山云々天武天皇卷小  
會於彼此云浪而探捕左右大臣云々本居氏志賀は古  
よ里廣き名小て郡名小もふれるとふは古は沙々那  
美は志賀よりも廣き名小やありけむ萬葉の歌ども  
小沙々那美の志賀と多くよみて志賀の沙々那美と

よめるはなし又九卷小ハ樂浪之平山ともあれバ此  
良のありまでかけある名小そありけむと云り今接  
小後小は志賀郡ある一處の名とおれるなるべし今  
昔物語十一小志賀郡篠波山まゝ篠波の長柄の山と  
も有さてその頃まで地名あることをわきまへあり  
と後々は細浪のことと思ひ誤れること往々小見  
えりさて集中小神樂聲浪とも神樂浪とも樂浪とも  
書和名抄但馬國氣多郡郷名小樂前と書て佐々乃久  
萬とよめるもありこハ古事記傳云上卷石屋戸段小  
手草結天香山之小竹葉而於天之石屋戸伏汗氣而踏  
登杼呂許志とある故事小因里神樂小ハ小竹葉を用  
ひ其と打振音乃佐サ阿佐阿と鳴小就て人等も同く音



と和せて。佐阿佐阿と云ける故あるべし。猿樂の謡物  
 小サツク。の聲ぞ樂むと云も。松風の颯々と云音より。  
 是小云のけあるなり。又竹葉の名を佐々と負るも。此  
 音よりそ出つらむ。細小の意以て名づけし。非む。  
 小竹と書る小字ハ。幹の小さきと云る。小て別なり。神樂  
 歌古本小。本方安以佐安以佐末方安以佐安以佐と云  
 ことあり。こハ佐々佐々と唱ふるの。又ハ佐阿佐阿と  
 如此書るの。何ふまれ。かの小竹葉の音小和せしる聲  
 より。出つることあるべしと云り。○大津宮は。上小出  
 たり。即今も大津といふ地なり。○所知食兼大宮者云

云大殿者云々とつゞけて意得べし。この御念計米可  
 といふを結めあり。とおもふは。くハ天皇之云々の新  
 小て。上の可を結むるときハ。次の天皇之云々の新  
 なりて。上より属るべし。○天皇之は。スメロキノと  
 讀味て其意をさし奉れり。すべて集中小。天皇と  
 訓べし。天智天皇とさし奉れり。すべて集中小。天皇と  
 書るハ。皆須賣呂伎と訓べし。皇王大皇大王大君ふど  
 書るハ。皆意富伎美と訓べし。天皇を所ふよ。里てハ。  
 み。皇をスメロキノともよめる類の誤謬。凡て此。集小ハ。  
 あれバ。今これをこハ。小正し。おくべし。才ホキノと。天皇とハ。書ぬ例ある證をいはむ。小まつ  
 才ホキノと。天皇とハ。書ぬ例ある證をいはむ。小まつ  
 集中小。吾皇。九四と。吾王。九九。我王。九二。吾大皇。九三。吾  
 大王。九十。我大王。九五。吾期大王。九二。和期大王。九五。和



期於保伎美一處吾於富吉美一處和我於保伎美一處ふと見  
えてかくあまゝ所ふくさぐ小書るの中ふ吾天皇と  
も我天皇とも吾期天皇とも和期天皇とも書る所ハ  
かつて一ところもなきは天皇と書てオホキことハ  
よまざり明證ありサカサマも一天皇と書てオホキことハ  
訓いふらばあまゝ所の中  
ふハ吾天皇とやうふも訓いふらばさて須賣呂伎と申さハ御祖  
書べあらぬことハは  
の天皇と申さことはさらふてそれよりまゝ轉里て  
皇祖より當今天皇代迄を兼て廣くも申せりふ  
正しく當今天皇御一人とさして申さることハのつて  
ふありしと古今集の頃より須倍良伎と申して當今天  
皇のことといへるハ又さてこゝ小天智天皇と指て  
一轉あるものなり

天皇と申せるを始て六卷四十八隅知之吾大王乃  
高敷爲日本國者皇祖乃神之御代自敷座流國爾之有  
者神武天皇の御十八二十小皇御祖乃御靈多須氣豆  
皇祖の天皇多方の御又二十皇神祖能可見能大御世  
靈多さけてといふ意又七是ハ岳仁天皇又二十葦原  
爾田道間守常世爾和多利是ハ岳仁天皇又葦原  
能美豆保國乎安麻久太利之良之賣之家流須賣呂伎  
能神能美許登能可之古久母波自米多麻比豆是ハ雄  
の吉野離宮を始廿卷二十小天皇乃等保伎美與爾毛  
給ひいと申せり廿卷四丁小天皇乃等保伎美與爾毛  
是ハ仁徳天皇の難波又五丁多可知保乃多氣爾何毛  
宮小御守しを申せり又十丁多可知保乃多氣爾何毛  
理之須賣呂伎能可未能御代欲利云々是ハ通々藝命



可之婆良能宇彌備乃宮爾美也婆之良布刀之利多  
 互々安米能之多之良志賣之祢流須賣呂伎能安麻能  
 日繼等 神武天皇 ぶどある。是らは正しく皇祖と申せ  
 る事の證なり。又二卷 四丁 小 天皇之神之御子之 是は  
 親王を申して皇祖神 十八 二丁 小 須賣呂伎能御代佐可  
 の御子孫といふ意 十九 三丁 小 須賣  
 延牟等 是は皇祖より繼座する御代の  
 呂伎能御代萬代爾 是は意ハ 三卷 一丁 小 皇祖神之御  
 門爾七卷 十二 小 皇祖神之神官人 十一 丁 三 小 皇祖乃  
 神御門 是等皇祖より當今天皇まで 二卷 七丁 小 天皇  
 之敷座國等 是は御祖の天皇あちの 十八 丁 八 小 須賣

呂伎能可未能美許登能伎己之乎須久爾能麻保良爾  
 三卷 八丁 小 皇祖之神乃御言乃敷座國之盡 是ら皇  
 を申て當今天皇 三て十七 四丁 小 須賣呂伎能乎須久  
 の事もこもれ 三 丁 十 須賣呂伎能之伎麻須久爾能ぶどあ  
 爾奈禮婆 又 二 丁 十 須賣呂伎能之伎麻須久爾能ぶどあ  
 るは 三卷 五丁 小 太皇之敷座國 荒水田久老の是を天  
 とよむべきなりといへ 十九 丁 十一 小 大王之敷座國者  
 るハ中々小甚偏あり 十九 丁 十一 小 大王之敷座國者  
 又 四丁 吾大皇之伎座婆可母ぶどあると同トさまあ  
 ぶら須賣呂伎と申せるハ皇祖より御代御代の天皇  
 の兼て食敷よくな里 又十五 三丁 小 須賣呂伎能等保  
 能朝廷等廿卷 十八 丁 小 天皇乃等保能朝廷ぶどある是



等も皇祖より御代御代天皇の遠朝廷と申せるふて  
意同ト但五卷五小大王能等保乃朝廷等十七四十小  
大王乃等保能美可度曾十五二十小於保伎美能等保  
能美可度登十八二十小於保伎見能等保能美可等々  
三卷二十小大王之遠乃朝廷跡ふどあれば意富伎美  
も須賣呂伎も同ト事ぞと思ふ人もあるべけれど志  
のらぎされど是ハオホキこといひて當今天皇御  
ス。メ。ロ。キ。と。い。ひ。て皇祖よりの御代も通ゆれば如此  
のれふもこれふもいへりけむかゝれば天皇と書る  
とバ何處ふてもス。メ。ロ。キ。と訓申てオホキことハ訓

まどく且天皇と申せと大君と申せとハその差別明  
なること上件小云る如くなるをあまり集中小必大  
君と申せべき處を天皇と書る處のある其ハ天皇ハ  
決く大皇の誤寫なるより下遷干寧樂宮時の長  
歌小天皇乃御命畏美とあるおつきていふべくさて  
又神漏岐神漏美と申せより須賣呂伎と申と意富伎  
美と申せとを集中小已よりて意得おくべき事のよ  
しなど合て首卷小委論里○神之御言ハ神とハ即天  
皇なり御言ハ借字尊ふて尊稱なり○大宮ハ大とハ  
尊稱なり宮は御屋の義なり○此間等雖聞ハ此間と



へ大津とさせざるなり。雖聞ヤケドモとハ大和オホトとてなるオホの大  
 津オホありと聞あれどもといふなり。○大殿オホトハ大オホとは  
 これも尊稱なり。殿トは和名抄云。唐令云。殿宮殿名。和名  
 止乃とあり。トノ按オホノ等能タナハ多タ那ナと音通オホふ。多タ那ナとは宮殿  
 棚閣ツツの如オホふ高タカ顯シとつく里サトあつれハ異オホくしてその造法ゾウホフ  
ハ則スレバ棚ツツといふ名も板イタを多タ那ナと通オホはせる例オホハ多タ那ナ  
ハ具ツク毛モ利リを等オホ能タナ具ツク毛モ利リと多タ那ナと通オホはせる例オホハ多タ那ナ  
ハ五イ丁チヨウみ多タ奈ナ此コノ久キウとあり元オホ上オホ宮ミヤといひこオホ殿  
ハ曆リキ本ホみは等オホ能タナ此コノ久キウとあり元オホ上オホ宮ミヤといひこオホ殿  
 と云るオホいひオホへあるなり。かく同オホじやうの事を二  
 句いひオホへてよめること古歌オホ多タし。此コノ事をオホ怨ウラミふ  
 いとむとさる時のオホこざあり。別オホて云オホときハ。惣オホて禁裏

と大宮オホミヤと稱オホし。其オホ中ナカみある諸殿オホを大殿オホトといふべけれ  
 ど。それまでオホハなくて。只いひオホへオホるのみなるべし。  
 こオホもその宮殿オホのなき事オホハあらじと。怨ウラミふとむる  
 心オホをおもせオホるなり。○此間コノマヘ等オホ雖オホ云オホ。此間コノマヘハ上オホ小オホ云  
 るオホ如オホし。雖オホ云オホとハ。大津オホツツみ來オホて土人オホのこオホなりとい  
 ひをオホふれどもといふ意オホなり。雖オホ聞オホ雖オホ云オホハいひオホへ  
 するのみオホハあらば。○霞立カスミタツ云々オホの四句オホ。舊本オホ小オホ。春草  
 之オホ茂生オホ有オホ霞立オホ春日オホ之オホ霧流オホとあれど。上オホ小オホ雖オホ聞オホ雖オホ云オホと  
 あるオホ小オホ引合オホど。今オホハ或オホ云オホ。霞立オホ春日オホ香霧流オホ夏草オホ香繁成オホ  
 奴留オホと注オホせるオホるオホしオホければ用オホつ。○春日オホ香霧流オホ



へ春日の霧合覆て明小見せぬるといふなり。霧流は  
 薫有<sup>キレ</sup>ふて氣の立<sup>カラ</sup>薫れるを云。集中<sup>アマガラフミナギラフ</sup>小。天霧合水霧合ま  
 る<sup>キラ</sup>霧相ともいへ里。即霧<sup>キラ</sup>と云も其意の名をさて  
 キリはカヲリあるべし。カヲの切コあるをキリ通ハ  
 ルともキルともいへる。カヲの切コあるをキリ通ハ  
 ベし。古事記傳小。佐間岐流の岐流は限る。親く通ふ。知  
 を云。霧ふども其意の名ありと云れどいあらざ。又神代  
 谷川氏<sup>アサギリミカワリミテカモ</sup>の霧はいきさるの義なりと云るはあらざ。○繁成<sup>シゲクサ</sup>  
 紀小。有朝霧而薫滿之哉とあるをも思ふべし。○繁成  
 奴留<sup>ヌル</sup>以上八句の意はさしも世小名高き此宮所は  
 も。さるの小こゝそと聞あれども正しくこゝそと云  
 ども。春霞の立るを里て見せぬる。夏草の生あがりて

隠せるの。大宮殿のありさまもあらぬいと疑ふ  
 なり。春霞と夏草とをいもと里合て云るは。春霞も夏  
 草も物形をなく覆ひ隠るものふれバ云るなり。あ  
 或人。舊本小。春草之云々とあるのをを用ひて。さて春  
 草之の之字ハ畧解小。歎の誤なるべしといへる。ふ  
 るべし。或本の霞立云々は春日と夏草と時節の多  
 へることといとくあるまどけれバ。とるべし。らぞと云  
 れど。こゝ此宮の見えぬをいあること。そと思ひあ  
 やりみて。春霞の立ふさび。見せぬる。夏草の生あ  
 げりて。隠せるものと。さふく。いへる。あれ。バ。時節を  
 違へて。いへる。こと。誠小。歎。慨。の。餘。小。惑。情。せ。る。さ。ま。あ  
 らはれて。中々小。あはれ。ふ。あ。け。れ。後。あ。が。ら。土。佐  
 日記小。春の海小。秋の木の葉も。ちる。ら。む。や。う。小。云  
 云とある。これハ春ふる。ふ。秋の物も。て。多。と。へ。多。る。似  
 ふる。こと。あり。但。し。春。ふる。ふ。秋。の。物。も。て。多。と。へ。多。る。似  
 云といへること。まこと。小。後。人。の。ま。ね。む。る。ま。じ。き。詞

萬葉古義一中

甲九







作と注せ里。こはいづれふてもあるべし。加奈思てふ  
言ハ。後、世ハるゾ悲哀の宇意との。悲哀む事小も。愛憐  
む事小も。戀慕ふ事小もいひて。ふらく心小あふる  
をいふ言なり。さればこも。大宮處の荒ふるをふの  
く哀憐と歎きさるなり。毛ハかゝる處小用ひさるハ。  
皆歎息の詞なり。嗚呼さてもかなしき事小てある哉  
といふ意なり。○歌意ハ。神武天皇より以來御世御世。  
大和國小のそ天、下志るしめしされば。その古き御あ  
と小志さおをせ給ふべきことなるをいふやう小お  
りし宛りあれむ小。ひあといふをのりの國小ハあ

らねど。近江小遷都しあまひけむ。九慮のそり知奉  
るべき小あらざ。さてその大宮處のあとをど小見む  
とて來しあども。そのあど處の見えぬハ。春霞の立覆  
ひて見せぬ。夏草の生えげりて隠せる。いとよく  
口をさき事そと。大宮處のいさく荒ふるを見て。さハ  
あるまじきと。霞や草のこさ小おるせてよこさる

カヘシ ャタ  
反歌



樂浪之。思賀乃辛崎。雖幸有。大

宮人之。船麻知兼津。

樂浪之ハ長歌サナミノふくもくいへり○思賀乃辛崎シガノカラサキ古寫崎ノ字  
本サキ碕クアレドは志賀郡拾穂本ある地名あり○雖幸有幸有と有  
幸とある幸ハ書紀サキグ無恙平安ふど書てサキグとよ  
め里幸字ハ心同ト辛崎といふとりけて幸とつゞけ  
多里こゝハ辛崎ハさきぐてその御代のまゝふてあ  
れどもといふふりの御世ハ官人の舟遊つねふせ

一所ふればいふなるべし○大官人之これハ大津宮  
の官人をいふ比ヒの言清て唱ウタべし清濁考○船麻知兼フ子マチカ子  
津ハ船ハ大官人の舟遊フる船をいふ麻知兼津チカ子ツとハ  
まてどもく待得ざるをいふ兼カ子ハ集中ハ多く不得  
とかけりああらむと心チカハ欲ふことチカのつひハその  
本意を得ざるをいふ津ツハ上の軍王の反歌ハいへり  
さてこゝハ官人の舟つねふよせ一處ふれば今もま  
つハこ里サびキして心の外ハ待不得を云るなりさて大  
宮の今もあるさまふなサりてよめるなり○歌意は思  
賀の辛崎ハかくあり一世のまゝハ平安サキくして大官



人の船此泊るを待らむ心の外不得待へいよ  
から崎の心さぶしからむとから崎をふのくあそれ  
みふるなり情あきものを情あるさまふあてよむ  
こと多く歌の心小をぢおもへど云も其意なり九  
卷八小白埼者幸在待大船爾真梶繁貫又將顧十三  
小樂浪乃志我能韓埼幸有者又反見云々ふどあり

左散難彌乃志我能大和太與  
杼六友昔人二亦母相目八毛

志我能大和太シガノオホワダ 舊本ハ一云此良乃とあり大ハその  
大廣きを稱ふるべし六卷四十小濱清浦愛見神代自  
千船湊大和太乃濱又和太との云るハ書紀神武天  
皇卷小釣魚於曲浦此集三卷一十小吾行者久者不有  
夢乃和太湍者不成而淵有毛七卷十一小夢乃和太事  
西在來寤毛見而來物乎念四念者これを懐風藻小和  
太とハ己ごのまり曲ガるよ一の名あるべし曲字をよ  
その意なるべし七ご小まのれる玉などいふと思  
へバもと曲れるをいふ稱なり蛇などの蟠といふと  
ごも此意なりさて和太と淀とハもと別なれどあ  
水岸の曲れる處ハ必水の淀むより畢竟ハ淀和太  
もひとつなるべし千載集六卷小泉川水美和太  
ふしつけ小岩間の氷る冬ハ來ふけり西行法師山家



集小河和太の淀み小留る流水の浮橋渡き五月雨の  
頃などある和太も同じ志ある小度會弘訓と云人の  
説小此歌さハあるまじき事をとへ小と里出てい  
へる小其ハ多ましく淀む事ありとも我昔の人小亦あふ  
ることハあらどといへるなり鳥の子を十づ、十ハか  
さぬともなど云ると同類なりと其隨筆小あるせ里  
此説きておさきところありさハあるまじき事の多  
とひさハありともと云こと古人の常小て小は鳥の  
息長川ハ絶ぬともなど云類小て例皆然里されハ或  
説小和太ハ海を和太といふ小同トく渡の義なるべ  
代格小見え又山城淀小大渡など小和太といふ處三  
浦も、とおのづらこさる小宜しきよりの名小も  
やあるらむいづれ小ありこの大和太の水ハ淀む  
世ふく勢多の方へ流るゝの故小多とひ此水のをど  
む世ハありともと、説さることなから海をいふ和多  
ふなりといへり此説さることなから海をいふ和多  
ハ多の言いづくも濁音の字を用ふる小て、もとより清  
太の言いづくも濁音の字を用ふる小て、もとより清

濁の差別あれバ、同言ならぬと知べし、されハなほ和  
太ハ曲里て水の淀む處をいふ名なること知れり  
此等の説ハ皆亦母相目ハ方と云を作者の得あはし  
といふ意小見さるよりの説なり、今次上の歌を合思  
ふ小これ小思賀の大和太の、こづあ昔の人小得あ  
をぬよ、小よみあ、小あは次小いふを併考べし  
○與<sup>ヨドムトモ</sup>杼六友ハ、<sup>トモ</sup>雖淀なり、<sup>シガ</sup>思賀の大和太のあり、世の  
ま、小て、淀むともと云あり、かくいふ故ハ、この大和  
太ハ曲里入あるところあれば、釣魚の遊なども小  
ハ、風波の難とも避て、こと小便宜しき處なれば、昔大  
津宮のあり、世小ハ、常小宮人の此處小舟を泊て、遊  
び、處と知れり、志ある小今ハ舊都とな里て、昔盛  
な里、世の如く小舟遊をる人も多えてあければ、あ



里一世のまゝ、ふかきらび、淀みてあれども、その詮か  
ききいへるなり。釣魚於曲浦とあるふて、和太ハ釣魚  
のあそびごとろふ宜しき事思ふべし。○昔人ニ此ハ  
大津官の時の人をさして云、かく大のさ小昔の人と  
いへること、詞のみやびなりと知べし。○亦母相目ハ  
方モ舊本ハ、ニ云將會跡母戸ハと注せり。目ハ牟ムのかよ  
へるなり。ハハ後世の也波と心得てあるべし。相むや  
ハ相ムとといふ意なり。方ハ歎息を含める助辭なり。さ  
て相ハ作者のあふふハあらで、思賀の大和太の昔の  
人ハ又あをむやハ得あもどといへるなり。次上の歌

小思賀乃辛崎雖幸有云々といへるも、辛崎のありし  
世のまゝ、ふさきくありて、大官人の舟を待ども待得  
ぬよし、ふいへるも、辛崎を主とあて、よめれば、今も  
一意ふて、大和太のこづらのうへふあして心得べ  
し。○歌意ハ、思賀の大和太のありし世のまゝ、ふ淀み  
てありとも、今ハ荒都となりぬれば、大官人の舟遊ユき  
べきよし、ふかければ、昔の人ハ又も得あふべあらね  
ば、昔盛なりし世のまゝ、ふ淀みてあらむも、その詮か  
き事なるふも、なほ昔の人ハあふ事もあらむあ  
て、待つ、あるらむ心の、いふさぶしかるらむと、大



和太とふのくあ

をれこあるなり

高市連黒人感傷近江舊堵

作歌

高市連黒人 昔本小高市古人とありさて其下小或書  
とあるハ誤ありこハ歌の初句をよみあハ傳られ  
やま里て後人のさあしらせしあるべしハ傳られ  
ど○舊堵 堵字拾穂本ハ三卷廿六小難波堵と書里  
玉篇云堵垣也五版爲堵とありこハ都字と通一用

あるあるべし 六卷三十八丁小天皇遊獵高圓野之時  
小黙池走堵里之中云々十六十九丁小  
新田部親王出遊于堵 三卷小高市連黒人近江舊都  
裡御見勝間田之池

歌載

あり

古人爾和禮有哉樂浪乃故京

乎見者悲寸

古人爾和禮有哉は我ハ古の人みてあれバ小やの意  
なり古人とハ大津宮の世の人といふなり有哉ハ安



禮婆也の意なるを。婆といもざるハ古言のつねなり。  
哉ハ疑の也なり。○樂浪乃上ふいへり。○見者悲寸か  
くとちめするハ上の疑の也の結なり。○歌意ハ大津  
宮の世の人ふてあらばみやこの荒るるの悲一ある  
べき理なり。されば我はその京都の全盛あり一時ふ  
あへる。古人ふてあれはふや。舊都を見ればかくまで悲  
傷と云るふて。さて打のへして思ひみればこれハそ  
の世の人ふもあらぬふ。かくまでいそくかかきハ  
心得づ。こき車そとみづのら我心とあやみある  
ふふのく此荒都をかかゝる意あらをれあり

樂浪乃國都美神乃浦佐備而。

荒有京見者悲毛。

樂浪乃國といへるハ、いをゆる吉野の國、泊瀬の國か  
ど云るふおなづ。○國都美神ハ天神ふむのへて地祇  
を久邇都神といふといさゝの異ふて、こゝハ樂浪  
の地をうゝをさまに御神あり。國ハ其國人を其國人  
いふ國。美ハ御ふてまゝへまつりて申せるなり。その  
土地をうゝをさまをかく云ハ十七十五ふ美知乃



奈加久爾都美可未波多妣由伎母之思良奴伎美乎米  
ナカクニツミカミハタビユキモシラヌキミミ  
 具美多麻波奈ともある小同じ神名帳小伊勢國度會  
カミタマハナ  
 郡度會國御神社等由氣宮儀式帳おも度會これ度  
ノ之國都御神社と見えあり  
 會の地をりしをきまきより呼るなるべし○浦佐備  
 は浦ハ借字小て心なり表の反小て人目小見え心  
 裏小て物きると云心を字良といふは字良吳悲志字  
ラガナシヤラモトナシ  
 良我奈志字良毛登那志あどの字良と同じ佐備は勝  
サビウマヒトサビヲトコサビヲトメサビカムサビマサビオキ  
 佐備字麻人佐備壯夫佐備壯女佐備神佐備山佐備翁  
サビサビ  
 佐備などの佐備小同じくそのもとい然儀の約れる  
シカブリ  
 言なるの多とへハ翁佐備ハ翁然儀の謂小て翁とあ  
リテ然サ容儀をきる意なり備ハ儀小て俗

何とあき容しとるをことなりびと云るも事無めく  
おもくと云小意同ト後撰集題詞小事あり貌あらむ  
 といふ轉望てハ多ハ荒ぶること小いふことハかれ  
意なり  
 且この佐備も荒ぶるなり或説小佐夫といふ  
ハ銅鐵あどのさび  
 といふが如く内ある物のおのづから外ありあびい  
 づるを云されバこハ國津御神の御心のうちあ  
 り事のおのづから外ありあび出するよりを云あ  
 りと云且此説さることなるら末小よりて本を解む  
とをるあら猶佐備の言此卷の末小浦佐夫流情佐麻  
の本義小あらざるなり  
 彌之二卷小晝羽裳浦不樂晚之四卷小且夕爾佐備  
子シ  
 將居あどの佐備小同じこハ樂浪の地をりしをき  
ヲラム  
 まに御神の心ハ荒備ふよりて遂小世の亂もあこり  
アレ名と云  
 て全盛なりし京都の荒あるよりあ里○荒有京ハ荒



である京あり。多流ハ、氏安流のつゞまれるなり。○悲  
モ、毛、字、拾穂本、小寸と作。カ、ナ、シ、キ、ハ、て、毛、ハ、歎息の  
は、こ、ハ、は、い、る、ハ、あ、る、ハ、必、毛、あ、る、ハ、べ、し。  
 詞なり。上、小、い、へり。○歌、意ハ、この大津、小、都、給、ひ、  
 の、國津御神の御心、小、か、あ、を、ば、して、あ、ら、び、ま、を、御心  
 つ、ひ、小、や、を、が、さ、く、て、此、都、の、あ、れ、さ、る、を、さ、べ、な、く  
 か、あ、き、こ、と、の、な、と、深、く、歎、き、あ、る、な、り。千載集十六  
ふ、さ、ハ、波、や  
國津御神のうらさびてふるき都  
小月ひと里をむ鶴岡放生會職人  
歌合ふとる棹の歌の聲まで浦  
さびて月の志をせぬ出る船人  
イデマセル  
キ  
クニ、トキ、カハシマノ、ミ、コノ、ヨミ  
 幸于紀伊國時川島皇子御

マセル ミウタ  
 作歌 或云。山上  
臣 憶 良作。

幸于紀伊國ハ、書紀小持統天皇朱鳥五年九月乙亥朔  
 丁亥、天皇幸紀伊。戊戌、天皇至自紀伊とあり。○川島皇  
 子は、天智天皇の皇子あり。書紀天智天皇、卷小、七年云  
 云。又有宮女生男女者四人、有忍海、造小龍女、曰色夫古  
シシヲミナ  
ヲタカ  
シヨブコ  
 娘、生一男二女、其一曰大江、皇女、其二曰川島、皇子、其三  
 曰泉、皇女。天武天皇、卷小、十四年春正月丁未朔丁卯、是  
 日、川島皇子、忍壁、皇子、授淨大參位。持統天皇、卷小、五年  
 春正月癸酉朔乙酉、增封淨大參川島百戶、通前五百戶。



九月己巳朔丁丑。淨大參皇子川島薨懷風藻。河島皇子一首。皇子者淡海帝之第二子也。云々。位終于淨大參時年三十五など見え。泊瀬部皇女を御妃と爲賜ひ。又高市郡越智小葬王奉れる趣など。二卷歌小見え。より。猶彼處

ふいふべし

白浪乃濱松之枝乃手向草幾

代左右二賀年乃經去良武。

白浪乃濱とつゞけたる意は古事記傳小詳し。今按ふ。

集中小。白菅之真野とよめるも。白菅の生る真野とい

ふ意。又炎乃春と作るも。炎の燎る春といふ意。小て。皆

同格なり。畧解ぬ。白浪のよめる濱といふべきを。言を

りの事おぼら。いさゝ可るおへり。これらハ打。猶これ

まるせて。略言といふべきものぬハあら。白浪之

らのこと下ふくハ。いへ里。又。つおもふ。白浪之

は濱の枕辭。小て。白浪の穂といふ意。小いひのけある

あるべし。倭姫世記。小も。伊勢國の事を。敷浪七保國之

吉國にあるも。敷浪之穂と。の。れる枕詞。あるを。倭考

べし。さて保と波とハ親く通ふ語。小て。波布理と。出雲







事と聞えも云々云々と云里是よよるべし草ハ借リ字  
 種なり何ふてもあれ手向の具といふ十三ふあふ坂  
 山小手向草ぬさじりおきてと有ふ同しと岡部氏の  
 云るが如し源貞世が道ゆきぶり小明石の浦ハ緑の  
 手向草打あがりつ松の年ふのくで濱小なびき馴さる枝小  
 の御歌の手向草を女蘿ふりといふ舊説のあるふよ  
 れるものなりされどこの手向ハ旅小ゆく人の山  
 手向草ハ女蘿小ハあら上小て神を祭里て平安らむことといのる小多くハ  
 いへ里されど然るこころふもかざるべらばさて  
 手向といふ言意は大神景井の取向の切里ある詞お  
 りと云るそよく叶へる取ハチと切るを集中スサトリ幣取  
如小通ハ一と

向と多くいへるをも考合べしイラヨマデニカ○幾代左右二賀云々  
 ハ濱松の枝小か、れるその手向種ハタムケガサ今ハ幾代まで  
 小のあ里ぬらむとあり賀ハ疑カの加なり清て唱べし  
 賀字をかけるハ正しからず或説小此卷の上小齊明天皇紀温泉の  
 幸あり又中皇命紀温泉小おはしての御歌あり齊明  
 天皇ハこの川島皇子の御祖母小ましく中皇女ハ御  
 伯母なりされバ齊明天皇中皇女などの紀國小おを  
 してついで此濱松のあよりふてあむけさせ給ひ  
 一事をよませ給へるふこそといへり此説志あるべ  
 しさてそのかみあむけ給ひ一具のなる存アルのごとく







字拾穗本

小ハカ



16  
175  
96



